

0001

開発準備・開発プロセス>ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：基礎

基幹会計システムの刷新で、法令対応部分は期日と承認文書が固定されている一方、従業員向け申請画面は利用者評価を反映して改善したい。開発方式の選択として最も適切なものはどれか。

ア．法令対応部分は段階承認を重視する予測型、申請画面は短い反復で検証する方式とし、統合点と共通品質基準を明確にする。

イ．全領域を同一の短い反復だけで進め、法令対応の承認文書は本番直前にまとめて作る。

ウ．全領域を予測型に固定し、申請画面の利用者評価は稼働後まで行わない。

エ．開発方式はチームごとに自由に選ばせ、統合手順や完了条件は定めない。

答え・解説

正答：ア

ア：特性の異なる領域を分けつつ、全体整合のため統合点・品質基準・成果物を合わせるのが合理的である。

イ：固定期日や承認証跡が必要な領域で文書化を最後に回すと、契約・品質上のリスクが高い。

ウ：利用者要求が変化しやすい画面まで固定型にすると、フィードバックを反映しにくい。

エ：方式を独立させるだけでは、インタフェースやリリース基準が不整合になりやすい。

総合解説：ライフサイクルモデルは一律に決めるのではなく、規模・複雑さ・要求変動・契約上の証跡などに合わせて選択・修整する。複数方式を併用する場合は統合条件を明示する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0002

開発準備・開発プロセス>ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：標準

新規AIサービスを組み込むシステムで、推論性能とランニングコストが要求を満たせるか不確実である。全体設計を固定する前の進め方として最も適切なものはどれか。

ア．不確実性は実装担当者に任せ、総合テストまで性能測定を行わない。

イ．性能・コストの成立性を確認する技術検証を早期に行い、その結果をアーキテクチャと反復計画へ反映する。

ウ．本番規模の全機能を先に実装し、最後に採否を判断する。

エ．性能要求を一旦削除し、機能完成後に新しい要求として追加する。

答え・解説

正答：イ

ア：成立性確認を後倒しにすると方式変更の影響が大きくなる。

イ：重大な技術リスクは早期に検証し、失敗時の手戻りを小さくするのが適切である。

ウ：全機能完成後の判断では、投資と手戻りが過大になる。

エ：重要な要求を根拠なく外すのは要求管理として不適切である。

総合解説：新規性が高い技術では、PoCやスパイク等で技術リスクを早期に顕在化させ、継続・変更・代替の判断材料にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0003

開発準備・開発プロセス > ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：標準

全国店舗向けシステムを機能群ごとに段階リリースする。インクリメンタル開発で特に先に決めるべき事項として最も適切なものはどれか。

- ア．各増分が独立して動けばよいので、共通データモデルは最終増分まで決めない。
- イ．最初の増分だけ詳細に計画し、後続増分の依存関係は管理しない。
- ウ．各増分の提供価値だけでなく、共通データ・外部インタフェース・互換性と統合テストの条件を定義する。
- エ．リリースごとに異なる認証方式を採用し、全体統一は運用開始後に行う。

答え・解説

正答：ウ

- ア：共通データの後回しは後続増分との不整合や移行コストを招く。
 - イ：依存関係を無視すると、後続増分が前提不足で遅延しやすい。
 - ウ：増分間の依存・共通資産・契約を明確にすると、段階リリースでも全体整合を保ちやすい。
 - エ：認証の不統一は利用者・運用・セキュリティの複雑性を高める。
- 総合解説：インクリメンタル開発でも、各増分を孤立させず、全体アーキテクチャと将来の結合を見据えて境界・契約・共通機能を管理する必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0004

開発準備・開発プロセス > ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：応用

小規模な社内ツール開発で共通フレームの全作業を同じ粒度で実施すると過剰になる。プロセスをテラリングする際の考え方として最も適切なものはどれか。

- ア．小規模であれば要件管理、テスト、構成管理を全て省略してよい。
- イ．標準プロセスは一切変更できないので、規模に関係なく同一の成果物を作る。
- ウ．担当者の経験だけで都度作業を省略し、判断記録は残さない。
- エ．省略・統合する作業の理由とリスクを明確にし、品質・承認・追跡性など必要な成果を満たす方法を残す。

答え・解説

正答：エ

- ア：規模が小さくても品質・変更・証跡の必要性は消えない。
 - イ：標準は適用環境に合わせた修整を前提とすることがある。
 - ウ：判断根拠がないと監査性や再現性が失われる。
 - エ：テラリングは目的を失わずにプロジェクトへ適合させる活動であり、根拠と統制を残す必要がある。
- 総合解説：プロセス標準は目的を満たすための枠組みである。テラリングでは、不要な形式を減らしても、リスクに応じて必要な制御と成果を確保する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0005

開発準備・開発プロセス > ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：基礎

ERPパッケージを中心に基幹業務を刷新する。標準機能への業務適合を優先し、追加開発を抑えたい場合の進め方として最も適切なものはどれか。

ア．早期にFit & Gapを行い、業務変更・設定・拡張の判断基準を定め、パッケージ更新への影響も含めて追加開発を管理する。

イ．現行業務を一切変えない前提で、全差分をアドオン開発する。

ウ．パッケージ標準機能は確認せず、従来システムの設計書をそのまま実装仕様にする。

エ．本番稼働後に初めてパッケージのバージョンアップ方針を検討する。

答え・解説

正答：ア

ア：パッケージ中心では、標準機能への適合と拡張の長期影響を早期に評価することが重要である。

イ：全差分の個別開発は保守性・更新追従性・コストを悪化させやすい。

ウ：パッケージの機能・制約を見ずに設計するのは採用目的に反する。

エ：更新方針は拡張方式や運用設計に影響するため後回しにしない。

総合解説：パッケージ導入は新規開発と同じ進め方をそのまま当てはめるのではなく、標準機能への業務適合、設定・拡張、データ移行、将来更新をライフサイクルに織り込む。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0006

開発準備・開発プロセス > ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：標準

顧客管理システムを地域単位で段階的に新システムへ移行する。旧・新システムが一定期間共存する場合、開発方式上の重要な考慮事項はどれか。

ア．新システムの開発だけに集中し、旧システムとのデータ同期は運用開始後に決める。

イ．共存期間のデータ同期・機能差・切戻し条件を設計し、それらを各増分の受入れ条件に含める。

ウ．地域ごとにデータ項目の意味を自由に換え、全地域移行後に統一する。

エ．切戻しは失敗を想定することになるため計画に含めない。

答え・解説

正答：イ

ア：同期の後回しは不整合を本番で発生させる危険がある。

イ：段階移行では共存がシステム要件となるため、同期、互換性、切戻しを設計・テストの対象にする。

ウ：データ意味の不統一は全体統合を困難にする。

エ：切戻し条件は重大障害時の業務継続に必要である。

総合解説：ライフサイクルの選択は開発工程だけでなく導入・移行まで含めて行う。段階導入では旧新共存が設計とテストの前提になる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0007

開発準備・開発プロセス>ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：応用

三つのベンダが別々のサブシステムを並行開発し、最終的に一つの業務システムとして結合する。全体ライフサイクル計画として最も適切なものはどれか。

- ア．各ベンダの完成まで相互仕様を共有せず、最後の結合で差異を解消する。
- イ．各ベンダに個別のデータ定義を認め、最終段階で変換プログラムだけで統一する。
- ウ．共通インタフェースのベースライン、統合用環境、結合マイルストーン、変更通知ルールを全ベンダで合意する。
- エ．統合責任者を置かず、問題が起きたベンダ同士で都度調整する。

答え・解説

正答：ウ

- ア：最後まで共有しないとインタフェース不一致が大量に顕在化する。
 - イ：データ意味の差は単純な変換だけでは解決できないことがある。
 - ウ：並行開発では早期に統合契約と変更統制を設け、結合時の不確実性を抑えることが重要である。
 - エ：全体責任が不明確だと横断課題の解決が遅れる。
- 総合解説：複数組織による並行開発では、各開発の自律性だけでなく、全体の統合点・共通資産・責任分担をライフサイクル計画に明示する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0008

開発準備・開発プロセス>ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：基礎

操作性確認のため短期間で作ったプロトタイプは、例外処理やセキュリティ設計を省略している。利用部門から「動いているのでそのまま本番化したい」と要望された。最も適切な対応はどれか。

- ア．利用者が承認したため、そのまま本番環境へ配置する。
- イ．画面が動くことをもって性能・安全性・保守性も満たすと判断する。
- ウ．プロトタイプのソースを保存せず、同じ仕様を記憶だけで再実装する。
- エ．プロトタイプの目的と不足品質を説明し、本番要件を満たす設計・実装・テストを別途行うか、製品化可能性を正式に評価する。

答え・解説

正答：エ

- ア：利用者承認はセキュリティや運用要件の検証を代替しない。
 - イ：一部機能の成立と非機能品質の成立は別である。
 - ウ：検証結果や仕様は再利用できるよう記録すべきである。
 - エ：試作は検証目的が限定されるため、本番利用の品質要求を満たすとは限らない。
- 総合解説：プロトタイプは目的を明確にし、捨てる試作か進化型かを区別する。試作を製品化する場合は不足する設計・品質・構成管理を正式工程で補う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0009

開発準備・開発プロセス > ライフサイクル・開発方式選択 | 難易度：標準

法定施行日に必須機能を確実に提供し、その後3か月で分析機能を追加する案件で、適切なライフサイクル計画はどれか。

ア．法定必須機能を最初のリリース境界として優先し、共通基盤は後続機能を阻害しないよう設計し、各リリースの完了基準を分ける。

イ．全機能が完成するまで一切リリースせず、法定施行日に間に合わなくても品質を優先する。

ウ．分析機能を先に完成させ、必須機能は最後の短期間でまとめて実装する。

エ．リリース境界を設けず、完成したプログラムを随時本番へ配置する。

答え・解説

正答：ア

ア：固定期日と価値の優先順位から増分境界を決め、共通設計との整合も維持するのが適切である。

イ：法定期日を守れない計画は成立しない。

ウ：優先順位が逆転しており、期日リスクが高い。

エ：無計画な随時配置では受入れ・構成管理・移行が不安定になる。

総合解説：ライフサイクル計画は納期、優先度、依存関係を踏まえてリリース単位を定義し、それぞれに品質・受入れ・移行条件を持たせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0010

開発準備・開発プロセス > 開発環境・開発標準 | 難易度：基礎

テスト環境では正常だが本番でだけ障害が起きる原因を調査したところ、ミドルウェアの設定値とバージョンが異なっていた。再発防止策として最も適切なものはどれか。

ア．本番障害が起きるたびに担当者が目視で設定を合わせる。

イ．環境構成をコードや構成台帳で管理し、承認済みのバージョン・設定を自動または再現可能な手順で各環境へ反映する。

ウ．テスト環境は開発速度を優先し、今後も本番との差異を記録しない。

エ．本番サーバへ開発者が直接ログインして随時設定を変更する。

答え・解説

正答：イ

ア：都度の手作業は再現性が低く、ヒューマンエラーを残す。

イ：環境差異を構成として管理し、再現性のある方法で適用することでドリフトを防ぎやすい。

ウ：差異を記録しなければテスト結果の妥当性を判断できない。

エ：無統制な直接変更は構成管理とセキュリティを損なう。

総合解説：開発環境は単にツールを揃えるだけでなく、対象環境との差異を把握・制御し、ビルドと配置を再現可能にすることが重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0011

開発準備・開発プロセス > 開発環境・開発標準 | 難易度：標準

複数チームで共通の開発標準を定める主な狙いとして最も適切なものはどれか。

ア．全ての設計判断を標準書で固定し、例外や技術判断を禁止する。

イ．標準を作成すればレビューやテストを実施しなくてよくなる。

ウ．設計・実装・レビュー・成果物の共通ルールを定め、品質のばらつきや引継ぎ・統合時の摩擦を減らす。

エ．開発者の使用するエディタの配色まで全案件で同一にすることを主目的とする。

答え・解説

正答：ウ

ア：標準にも適用条件や例外管理が必要であり、全判断を固定するものではない。

イ：標準は品質活動を代替せず、むしろレビューやテストを支える。

ウ：標準化は重要な作業・成果物・記述方法を揃え、複数人・複数組織での一貫性を高める。

エ：生産性に影響する設定はあり得るが、開発標準の中心目的ではない。

総合解説：開発標準は品質・保守性・統合性を支える共通ルールである。プロジェクト特性に応じたテーラリングと例外承認の仕組みを併せて持つ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0012

開発準備・開発プロセス > 開発環境・開発標準 | 難易度：基礎

半年後に同じソースコードから再ビルドしたところ、依存ライブラリの最新版が自動取得され、挙動が変わった。対策として最も適切なものはどれか。

ア．常に最新版を取得することを標準とし、変更内容は確認しない。

イ．依存ライブラリの名称だけ記録し、バージョンは担当者の記憶に任せる。

ウ．問題が出た場合だけ過去のライブラリをインターネット上から探す。

エ．依存バージョンと取得元を固定・記録し、ビルド成果物と使用した依存関係を追跡できるようにする。

答え・解説

正答：エ

ア：最新版には互換性破壊や脆弱性修正などがあり、自動採用は統制されない変更となる。

イ：名称だけでは再現性を確保できない。

ウ：過去版が入手できる保証はなく、サプライチェーン上のリスクもある。

エ：依存関係を固定・追跡すると、同一ソースから同等成果物を再現しやすい。

総合解説：開発環境ではソースだけでなく、コンパイラ、ライブラリ、設定、ビルド手順を構成情報として管理し、成果物との対応を追跡できるようにする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0013

開発準備・開発プロセス > 開発環境・開発標準 | 難易度：標準

本番の顧客データをコピーして性能テストに使う案が出た。個人情報を含むため、開発環境設計として最も適切なものはどれか。

ア．必要な統計特性を保つ匿名化・仮名化データまたは合成データを用い、利用目的・アクセス権・保管期限も管理する。

イ．性能測定の精度を優先し、本番データを全開発者が閲覧できる共有領域に置く。

ウ．ファイル名を変更すれば個人情報ではなくなるので、そのまま使用する。

エ．本番データをコピーした後は、開発環境なのでアクセスログを取得しない。

答え・解説

正答：ア

ア：テスト目的に必要な特性を確保しつつ、機密性と最小権限を満たす方法を選ぶべきである。

イ：不要な閲覧権限は漏えいリスクを高める。

ウ：識別子や内容が残っていればファイル名変更では保護にならない。

エ：開発環境でも機密データ利用時の監査性は重要である。

総合解説：開発・テスト環境は本番より緩い統制でよいとは限らない。テストデータは目的に必要な範囲へ限定し、保護措置と利用記録を設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0014

開発準備・開発プロセス > 開発環境・開発標準 | 難易度：応用

継続的インテグレーションを導入したが、ビルドスクリプトを各開発者がローカルで自由に変更しており、CIサーバの結果と一致しない。最も適切な改善はどれか。

ア．CIの結果を参考情報に格下げし、ローカル結果だけでリリース可否を判断する。

イ．ビルド・テスト手順を版管理対象にし、CIで同じ定義を使用して、変更はレビューと履歴管理の対象にする。

ウ．各開発者のPC環境を毎週手作業で比較する。

エ．ビルドスクリプトは成果物ではないので構成管理対象から外す。

答え・解説

正答：イ

ア：統一した判定基準がなくなり品質統制が弱くなる。

イ：自動化定義自体を構成管理すると、ビルド・テストの再現性と変更追跡性が高まる。

ウ：手作業比較では変更を確実に追跡できない。

エ：ビルド定義は成果物生成を左右する重要な構成項目である。

総合解説：CI/CDでは自動化するだけでなく、自動化の定義、実行環境、権限、承認を管理し、同じ入力から同じ判定を得られる状態を作る。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0015

開発準備・開発プロセス > 開発環境・開発標準 | 難易度：標準

新しい静的解析ツールを全社標準にしようとしている。導入判断として最も適切なものはどれか。

ア．市場シェアが高ければ対象システムとの適合性を確認せず採用する。

イ．警告件数が多いほど品質が高いとみなし、全警告を同じ優先度で修正する。

ウ．対象言語・検出規則・誤検知率・既存CIとの連携・運用負荷を試行で評価し、採用基準と例外処理を定める。

エ．導入後のルール更新やバージョン管理は各チームへ完全に任せる。

答え・解説

正答：ウ

ア：一般的な評価と個別プロジェクトの適合性は別である。

イ：誤検知や重要度差があり、件数だけでは品質を判断できない。

ウ：ツールは目的・対象・運用と組み合わせて評価し、導入後もルールと版を管理する。

エ：基準が分散すると品質判定が一貫しない。

総合解説：開発環境のツール選定では機能だけでなく、適用範囲、既存工程との統合、教育、運用コスト、設定の構成管理まで評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0016

開発準備・開発プロセス > 開発環境・開発標準 | 難易度：基礎

受入れテストで承認したバイナリと、本番に配置するバイナリが同一であることを保証したい。最も適切な運用はどれか。

ア．本番直前に同じソースから開発者PCで再ビルドする。

イ．ファイル名が同じなら同一成果物とみなす。

ウ．本番担当者が必要に応じて設定ファイルやバイナリを直接修正する。

エ．承認済みビルド成果物をリポジトリで不変に保管し、識別子やハッシュを用いて同じ成果物を昇格させる。

答え・解説

正答：エ

ア：環境や依存関係の違いで異なる成果物になる可能性がある。

イ：ファイル名は内容の同一性を証明しない。

ウ：直接修正はテスト済み状態を破壊する。

エ：一度検証した成果物そのものを昇格させると、再ビルド差異や無承認変更を避けられる。

総合解説：開発環境とリリース管理は連続している。検証済み成果物の一意識別と完全性確認により、テスト結果と本番配置物を結び付ける。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0017

開発準備・開発プロセス > 開発環境・開発標準 | 難易度：標準

コンパイラをメジャーバージョンアップすると、警告規則と生成コードが変わる可能性がある。既存開発中プロジェクトへの適用として最も適切なものはどれか。

ア．影響範囲を評価し、代表コードのビルド・テストで差異を確認した上で、適用時期と必要な再検証範囲を決める。

イ．新しい版なので無条件に即日切替えし、過去成果物も全て再ビルドする。

ウ．開発環境の変更は製品コードを変更しないので、テストは不要とする。

エ．チームごとに任意のコンパイラ版を使い、成果物差異は無視する。

答え・解説

正答：ア

ア：ツールチェーン変更は成果物に影響し得るため、変更管理と再検証範囲の判断が必要である。

イ：新しさだけでは互換性や品質を保証しない。

ウ：生成物が変われば製品の挙動に影響する可能性がある。

エ：版の混在は再現性・障害解析を困難にする。

総合解説：開発環境は構成管理対象であり、ツールの版変更も製品品質への影響を評価して段階的に適用する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0018

開発準備・開発プロセス > 開発計画・リスク・構成管理 | 難易度：標準

詳細設計を前倒しするため、外部インタフェース仕様が未確定のまま実装を開始する案が出た。計画上の対応として最も適切なものはどれか。

ア．納期短縮のため未確定事項は記録せず、実装者が推測して進める。

イ．未確定事項をリスクとして明示し、仮契約・確定期限・変更時の再作業範囲を定めて、依存関係を計画に反映する。

ウ．インタフェース仕様が確定するまで他の独立作業も全て停止する。

エ．後で変更が出た場合は、担当者の残業で吸収することを前提とする。

答え・解説

正答：イ

ア：推測実装は不整合を増やし、後工程で発見しにくい。

イ：依存の不確実性を可視化し、仮定と確定点を計画へ入れることで手戻りを制御できる。

ウ：依存しない作業まで止める必要はなく、並行可能性を検討すべきである。

エ：工数増を無計画に人的負担へ転嫁するのはリスク対策ではない。

総合解説：実施計画は作業一覧だけでなく、前提、依存関係、資源、リスク、意思決定時点を結び付けて整合させる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0019

開発準備・開発プロセス > 開発計画・リスク・構成管理 | 難易度：基礎

性能要件が厳しいバッチ処理で、新DB製品の処理能力が未知である。スケジュールへの影響を最小化するリスク対応はどれか。

- ア．性能不足が発生する確率は不明なのでリスク台帳には登録しない。
- イ．総合テストで未達が判明したら、その時点で製品選定からやり直す。
- ウ．早期に代表データ量で性能検証し、未達時の代替DBや設計変更を実行する判断期限を設定する。
- エ．性能要件を満たせることを前提に、余裕日数を全て削除する。

答え・解説

正答：ウ

ア：不確実だからこそリスクとして管理する価値がある。

イ：後工程での製品変更は影響が大きい。

ウ：早期検証と代替策・判断期限を組み合わせると、重大リスクの顕在化を前倒しできる。

エ：不確実性があるのにバッファを削るのはリスクを高める。

総合解説：リスク管理では、発生確率・影響・兆候を考慮し、回避・低減・移転・受容などの対応と実行条件を計画する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0020

開発準備・開発プロセス > 開発計画・リスク・構成管理 | 難易度：応用

システム結合テスト開始時点で、設計書、API仕様、ソース、設定、テストデータの組合せを基準状態として固定する主な目的はどれか。

- ア．以後はいかなる変更も禁止するため。
- イ．全ての構成項目を同じ担当者だけが編集するため。
- ウ．テスト終了後に設計書を削除できるようにするため。
- エ．どの構成を対象にテストしたかを再現・追跡でき、以後の変更を正式な影響評価の対象にするため。

答え・解説

正答：エ

ア：承認された変更は可能であり、変更禁止を意味しない。

イ：権限集中が目的ではなく、識別・版管理・変更統制が目的である。

ウ：設計書は保守や監査にも必要な成果物である。

エ：ベースラインは検証対象と変更の基準点を作り、テスト証跡と構成を結び付ける。

総合解説：構成管理では構成項目を識別し、ベースラインを設定し、変更状態と実体を一致させる。特にテスト・リリースでは対象構成の再現性が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0021

開発準備・開発プロセス > 開発計画・リスク・構成管理 | 難易度：標準

本番直前に重大なセキュリティ欠陥が見つかり、通常の変更審査日程では間に合わない。構成管理として最も適切な対応はどれか。

ア：緊急変更手順を適用し、権限者の承認、影響評価、限定した再テスト、変更記録とベースライン更新を行う。

イ：緊急なので開発者が直接修正し、記録は不要とする。

ウ：通常手順を守るため、重大欠陥を既知のまま本番リリースする。

エ：修正だけ適用し、設計書やテスト結果との整合は次年度に確認する。

答え・解説

正答：ア

ア：緊急時は迅速性を確保しつつ、承認・影響評価・証跡を簡略化した正式手順で維持する。

イ：無記録変更は再現性と監査性を失う。

ウ：重大な既知欠陥を放置する判断もリスク評価が必要であり、単なる手順遵守ではない。

エ：成果物間の不整合を長期間残すと保守障害の原因になる。

総合解説：変更管理は速度を妨げるためではなく、変更の正当性・影響・検証・構成整合を保証するためである。緊急用フローをあらかじめ設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0022

開発準備・開発プロセス > 開発計画・リスク・構成管理 | 難易度：基礎

外部API提供会社の仕様確定が遅れるリスクを管理する。単に「遅れるかもしれない」と記録するより有効な管理方法はどれか。

ア：発生確率を一度決めたら、プロジェクト終了まで見直さない。

イ：仕様確定予定日、遅延の早期兆候、影響を受ける作業、代替モック利用などの対応開始条件を定める。

ウ：遅延が確定するまでチームへ共有しない。

エ：影響が出た後に初めて対応策を考える。

答え・解説

正答：イ

ア：状況変化に応じて確率・影響は更新する必要がある。

イ：監視指標とトリガーを設定すると、リスクが問題化する前に対策を開始できる。

ウ：関係者への早期共有が代替案の準備に必要である。

エ：事後対応だけではリスク管理の予防的価値がない。

総合解説：リスク管理は識別後も継続し、兆候・責任者・対応条件・残余リスクを追跡する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0023

開発準備・開発プロセス > 開発計画・リスク・構成管理 | 難易度：標準

暗号鍵管理機能の詳細設計を、新人だけのチームに短納期で割り当てる計画になっている。プロジェクト計画上の対応として最も適切なものはどれか。

ア．新人の成長を優先し、専門家の関与やレビューは行わない。

イ．難易度は工数だけの問題なので、人数を増やせば同じ品質になるとみなす。

ウ．必要スキルを明確にし、経験者レビューや専門家支援、教育、作業分割を計画へ組み込む。

エ．セキュリティ設計は総合テストで確認できるため、設計段階のスキル不足は無視する。

答え・解説

正答：ウ

ア：重要機能で支援を外すと設計欠陥の見逃しリスクが高い。

イ：専門性が必要な作業は単純な人数増加で代替できない。

ウ：作業の重要性和要員能力のギャップを埋める措置を計画するのが適切である。

エ：後工程テストだけでは設計上の欠陥を効率よく防げない。

総合解説：開発計画は工数だけでなく、作業に必要な能力と実際の要員スキルを対応させ、教育・レビュー・専門支援を含める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0024

開発準備・開発プロセス > 開発計画・リスク・構成管理 | 難易度：応用

共通APIの項目名変更を一チームが実施したところ、他チームの結合テストが停止した。再発防止策として最も適切なものはどれか。

ア．API仕様は文書なのでソースコードだけを構成管理対象にする。

イ．変更したチームがチャットで連絡すれば正式な影響分析は不要とする。

ウ．他チームは常に最新APIへ即時追隨することを義務付け、互換性を考慮しない。

エ．API仕様を構成項目として版管理し、変更要求に影響分析・互換性方針・移行時期・関係チーム承認を含める。

答え・解説

正答：エ

ア：仕様変更はコードと同等に結合へ影響する。

イ：非公式連絡だけでは対象・時期・承認の追跡ができない。

ウ：即時追隨は各チームの計画や本番互換性を破壊し得る。

エ：共有インタフェースは横断的な構成項目であり、変更の影響と移行を管理する必要がある。

総合解説：構成管理はファイルの版管理に留まらず、共有契約の変更を関係者と統制し、どの版の組合せが有効かを明確にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0025

開発準備・開発プロセス > 開発計画・リスク・構成管理 | 難易度：標準

各担当者が「実装90%完了」と報告しているが、レビュー未実施、単体テスト未完了で、実態が分からない。計画・進捗管理の改善として最も適切なものはどれか。

ア．作業ごとにレビュー完了、テスト合格、成果物登録など客観的な完了条件を定め、進捗をその達成で把握する。

イ．90%という自己申告を平均し、全体進捗率とする。

ウ．コード行数が多い担当者ほど進捗が高いと判定する。

エ．納期直前まで進捗確認を行わず、完成物だけを見る。

答え・解説

正答：ア

ア：完了条件を明確にすると、主観的なパーセントより品質を含めて進捗を判断できる。

イ：自己申告率は定義が人によって異なりやすい。

ウ：コード量は価値や完成度を直接表さない。

エ：遅れや品質問題の早期把握ができない。

総合解説：実施計画では成果物、責任者、開始・終了条件を定義し、進捗評価を再現可能にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0026

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：基礎

方式設計で「決済要求は二重処理されないこと」が要求されている。詳細設計への展開として最も適切なものはどれか。

ア．二重処理防止は利用者の注意事項としてマニュアルだけに記載する。

イ．受付API、業務サービス、DB更新など関係ユニットへ一意要求ID・重複判定・トランザクション境界の責務を割り当て、テスト可能な仕様にする。

ウ．どのユニットで実現するか決めず、実装者の判断に任せる。

エ．画面ボタンを一度押したら無効化するだけで全経路の二重処理防止を保証する。

答え・解説

正答：イ

ア：システム要件を利用者行動だけに依存させている。

イ：上位要件を複数ユニットの具体的責務に分解し、実装とテストへ追跡可能にするのが適切である。

ウ：責務が不明確だと抜け・重複実装が起こる。

エ：ネットワーク再送やAPI再試行など画面以外の重複経路を防げない。

総合解説：詳細設計では上位要件を実装可能な単位に割り当て、インタフェース、状態、例外、データ更新を具体化する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0027

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：標準

在庫照会APIの詳細設計で、要求・応答のJSON形式だけが定義されている。追加で特に必要な事項はどれか。

- ア．サーバのソースコード行番号を外部仕様として固定する。
- イ．正常応答のサンプルだけを増やし、異常時の仕様は実装後に決める。
- ウ．タイムアウト、エラーコード、再試行可否、認証、入力制約、互換性など呼出し側が判断に必要な契約を定義する。
- エ．利用が増えるたびにAPI項目名を変更する方針を定める。

答え・解説

正答：ウ

- ア：内部実装の行番号は外部契約に不適切である。
 - イ：異常系を後回しにすると呼出し側との不整合が生じる。
 - ウ：インタフェースはデータ形式だけでなく、失敗時の意味や時間特性、セキュリティを含む契約として設計する。
 - エ： unnecessaryな破壊的変更は互換性を損なう。
- 総合解説：詳細設計ではコンポーネント・ユニット間の契約を矛盾なく具体化し、結合テスト可能な仕様にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0028

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：標準

注文検索で「顧客ID + 注文日範囲」の検索が非常に多い。詳細設計でDBの性能を改善する検討として最も適切なものはどれか。

- ア．全列に個別索引を作れば常に最速になると判断する。
- イ．論理データモデルが正規化されていれば物理設計の検討は不要とする。
- ウ．性能問題は本番DBのCPUだけを強化して解決する。
- エ．実際の選択度・更新頻度・実行計画を確認し、検索条件に適した複合索引などを評価する。

答え・解説

正答：エ

- ア：索引は更新・容量コストがあり、過剰作成は逆効果になり得る。
 - イ：論理設計と物理性能設計は別の観点がある。
 - ウ：資源増強だけではSQLや索引設計の問題を解決しない場合がある。
 - エ：物理設計はアクセスパターンと更新コストを踏まえて索引・配置等を選ぶ。
- 総合解説：詳細設計では論理モデルをターゲット環境へ落とし込み、データ量・検索・更新特性を基に物理構造を決定する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0029

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：応用

分散システムで障害発生時に一連の処理を追跡できない。詳細設計として最も適切な改善はどれか。

ア．要求単位の相関ID、時刻、主要イベント、結果コードを各サービスで一貫して記録し、機密情報は必要最小限にする。

イ．全ての入力データと認証情報を平文でログへ残す。

ウ．エラーが出たサービスだけローカル時刻でログを残し、他サービスとは関連付けない。

エ．ログ量を減らすため正常処理も障害処理も一切記録しない。

答え・解説

正答：ア

ア：相関IDと共通項目により分散処理を横断追跡しやすくし、機密性も考慮する。

イ：秘密情報の過剰記録は漏えいリスクになる。

ウ：関連付けできなければ根本原因分析が難しい。

エ：必要な証跡がなくなり運用・監査に支障が出る。

総合解説：詳細設計では運用・保守要件を実装レベルに展開し、診断に必要な観測情報と保護要件を両立させる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0030

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：基礎

残席1の予約に対し、二つの要求が同時に「残席あり」を読み取り、両方が予約確定してしまった。詳細設計として最も適切な対策はどれか。

ア．画面に「同時に押さないでください」と表示する。

イ．在庫確認と確定更新を整合性が保証される同一の排他・条件付き更新・トランザクション等で実行する。

ウ．予約確定後に残席が負数になった場合だけ翌日手作業で戻す。

エ．アプリケーションサーバを増やせば競合はなくなると考える。

答え・解説

正答：イ

ア：利用者行動だけでは同時実行を制御できない。

イ：競合する読み取りと更新を原子的に扱う必要がある。

ウ：不整合を事後補正するだけでは予約の正当性を保証できない。

エ：サーバ増加はむしろ同時実行を増やす可能性がある。

総合解説：詳細設計では共有資源への同時アクセスを想定し、整合性を保つトランザクション境界や排他方式を具体化する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0031

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：標準

申請は「下書き→申請済み→承認済み/却下」の状態を取る。承認済みから下書きへ戻す操作を禁止したい。詳細設計として有効な方法はどれか。

ア．画面ボタンを隠すだけで、APIからの状態変更は常に許可する。

イ．状態値を自由文字列にし、どの値でも更新可能にする。

ウ．状態と許可されるイベント・遷移条件を明示し、業務ロジックでも遷移を検証する。

エ．状態遷移は利用者マニュアルだけに書き、プログラムでは検査しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：UI制御だけでは別経路からの更新を防げない。

イ：自由な値は整合性を損なう。

ウ：状態機械として遷移条件を設計し、実装で強制することで不正遷移を防げる。

エ：仕様だけでなく実装上の制約として必要である。

総合解説：状態を持つ業務では、状態・イベント・ガード条件・副作用を詳細設計に落とし込むと実装とテストが明確になる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0032

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：標準

外部APIから受信する数量は1～9999の整数という要件である。詳細設計として最も適切なものはどれか。

ア．DBへ登録できるか試し、失敗した場合だけ入力不正と判断する。

イ．画面経由の値だけ検証し、API経由の値は信頼する。

ウ．範囲外の値は自動的に9999へ丸め、利用者には通知しない。

エ．型・範囲・必須性を境界で検証し、違反時の応答とログを定義し、内部処理には検証済み値だけを渡す。

答え・解説

正答：エ

ア：DBエラーに依存すると意図した業務エラーを表現できず副作用も起こり得る。

イ：外部入力を経路にかかわらず検証が必要である。

ウ：黙った補正はデータ意味を変え、誤処理につながる。

エ：信頼境界で仕様に沿う入力検証を行い、異常時の振る舞いも契約化するのが適切である。

総合解説：詳細設計では正常系だけでなく、入力条件、例外、エラー通知、ログ、リカバリを具体化する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0033

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：基礎

外部サービスへのHTTP呼出しにタイムアウトがなく、相手停止時にスレッドが枯渇した。詳細設計で最も適切な改善はどれか。

ア．業務上許容できる待ち時間から接続・応答タイムアウトを定め、再試行回数や代替処理も含めて資源を解放できる設計にする。

イ．相手が復旧するまで無期限に待てばデータ欠落を防げるので変更しない。

ウ．タイムアウトは全外部サービスで一律1秒に固定する。

エ．呼出し失敗は全て無限再試行し、利用者へは常に成功を返す。

答え・解説

正答：ア

ア：待ち時間と再試行は業務・相手特性に合わせて制限し、障害の波及を防ぐ必要がある。

イ：無期限待機は資源枯渇を起こし得る。

ウ：適切な時間はサービス特性やSLAで異なる。

エ：無限再試行は負荷増幅や二重処理を招く。

総合解説：外部依存を含む詳細設計では、正常応答だけでなく遅延・停止・部分失敗を前提にタイムアウト、再試行、代替、監視を定める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0034

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：応用

開発・検証・本番で接続先が異なるため、ソースコード中のURLを書き換えてビルドし直している。改善として最も適切なものはどれか。

ア．本番URLをソースへ固定し、開発者はローカルDNSで回避する。

イ．環境依存値を設定として外部化し、版管理・秘密情報管理・環境ごとの承認済み値を分離して扱う。

ウ．接続先をコメントに書き、リリース担当者が手作業でコードを書き換える。

エ．本番パスワードも同じ設定ファイルに平文でコミットする。

答え・解説

正答：イ

ア：開発環境の再現性や事故防止の点で不適切である。

イ：環境差分をコードから分離すると同一成果物を各環境で昇格させやすい。秘密値は別の保護も必要である。

ウ：手作業コード変更はテスト済み成果物との同一性を失う。

エ：秘密情報の版管理への平文登録は漏えいリスクとなる。

総合解説：詳細設計では可変設定と製品ロジックの境界を定め、構成管理・秘密管理・リリース方式と整合させる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0035

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：標準

モデルから一部コードを自動生成する開発で、生成後に開発者が生成コードを直接修正したため、再生成時に修正が失われた。最も適切な改善はどれか。

- ア．再生成を禁止し、以後は生成コードだけを正本にする。
- イ．生成コードの直接修正を許可し、変更箇所は担当者の記憶で管理する。
- ウ．修正すべき情報をモデル・生成テンプレート・拡張ポイントのどこに持つか規約化し、生成物を手修正しない範囲を明確にする。
- エ．モデルとコードの差異は動けば問題ないので管理しない。

答え・解説

正答：ウ

- ア：モデル駆動の利点を失い、将来変更が困難になる。
 - イ：再現性・追跡性がなくなる。
 - ウ：正本と生成物の関係を明示し、再生成可能な変更経路に統一する必要がある。
 - エ：差異放置は設計文書と実装の不一致につながる。
- 総合解説：自動生成を使う場合も、どの成果物が正本か、どこまで手編集可能か、変更をどう再生成へ反映するかを詳細設計・開発標準で定める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0036

詳細設計・結合・テスト > 詳細設計・実装への展開 | 難易度：標準

詳細設計書に「高負荷時は適切に処理する」とだけ書かれている。レビューでの指摘として最も適切なものはどれか。

- ア．実装者が理解できる表現なので、そのままでよい。
- イ．性能は非機能要件なので詳細設計には記載しなくてよい。
- ウ．テスト担当者が後から期待値を決めればよい。
- エ．負荷条件、キュー上限、タイムアウト、拒否・縮退時の挙動など実装・テスト可能な条件へ具体化する必要がある。

答え・解説

正答：エ

- ア：担当者間で解釈が分かれ、一貫性を失う。
 - イ：非機能要求も方式・詳細設計へ割り当てる必要がある。
 - ウ：期待値は上位要件と設計から導くべきで、テスト側だけで決めない。
 - エ：曖昧な表現では実装・テストの判定基準にならないため具体化が必要である。
- 総合解説：詳細設計の評価では上位要件への追跡性、内部一貫性、実装・テスト可能性、運用・保守実現性を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0037

詳細設計・結合・テスト > システム結合・インタフェーステスト | 難易度：基礎

10個のサブシステムを結合する計画を作る。最も適切な考え方はどれか。

ア．重要インタフェース、技術的不確実性、依存関係を基に段階的な結合順序を決め、各段階のテスト要件と責任を定義する。

イ．完成した順に無条件で本番同等環境へ接続する。

ウ．全サブシステムが完成するまで一切結合せず、一度に全て接続する。

エ．結合順序はシステム品質に影響しないので、担当者の都合だけで決める。

答え・解説

正答：ア

ア：高リスク箇所を早期に結合すると不整合を早く発見でき、障害切分けもしやすい。

イ：依存やテスト準備を無視すると不安定な結合になる。

ウ：一括結合は原因特定が難しく、問題を終盤に集中させる。

エ：結合順序はリスク・依存・検証可能性に影響する。

総合解説：システム結合計画には対象構成、順序、手順、テストデータ、責任、予定を含め、進捗に応じて段階的に要件適合を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0038

詳細設計・結合・テスト > システム結合・インタフェーステスト | 難易度：標準

システムAは金額を「円」、システムBは「千円」単位として扱うが、JSONの型はいずれも整数である。結合テストで重要な観点はどれか。

ア．JSONの構文が正しければ業務的な整合性は確認しなくてよい。

イ．型だけでなく単位、桁、丸め、必須性、コード体系などデータの意味を契約とテストケースで確認する。

ウ．整数同士なので自動的に互換性があると判断する。

エ．金額差は利用者が目視で気付くためテスト対象外とする。

答え・解説

正答：イ

ア：構文テストだけでは意味の誤りを検出できない。

イ：インタフェースは形式と意味の両方が一致して初めて正しく連携できる。

ウ：同じ型でも単位や意味が異なることがある。

エ：本番発見に依存するのは不適切である。

総合解説：結合テストではプロトコル、データ形式、意味、境界、エラー処理、時間特性まで確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0039

詳細設計・結合・テスト > システム結合・インタフェーステスト | 難易度：標準

マイクロサービス間のAPI変更で、提供側の単体テストは合格したが利用側が動かなくなる事故が続いている。対策として有効なものはどれか。

- ア．提供側のコードカバレッジだけを100%にする。
- イ．利用側は常に提供側の最新実装へ即時追従するため、互換性テストを行わない。
- ウ．利用側が依存する要求・応答・エラー等の契約を自動テストし、提供側変更時に互換性を検証する。
- エ．API仕様書を廃止し、実装を唯一の情報源にする。

答え・解説

正答：ウ

ア：内部カバレッジは外部契約適合を保証しない。

イ：複数利用者がいる場合に即時追従は現実的でない。

ウ：サービス間の契約を検証すると、提供側内部の正常性だけでは見えない互換性破壊を検出できる。

エ：契約が不明確になり結合リスクが増す。

総合解説：結合テストでは各部品単独の正しさだけでなく、相互に合意したインタフェースの互換性を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0040

詳細設計・結合・テスト > システム結合・インタフェーステスト | 難易度：応用

上位モジュールから呼び出される下位の決済サービスが未完成だが、上位モジュールの結合動作を先に確認したい。このとき利用する代替物として適切なものはどれか。

- ア．上位モジュールを呼び出すためのドライバを決済サービスの代わりに置く。
- イ．本番決済サービスへ直接接続し、未完成部分は利用者に回避してもらう。
- ウ．下位サービスが完成するまで、上位モジュールのテストを一切行わない。
- エ．決済サービスのインタフェースを模擬して応答を返すスタブを用意する。

答え・解説

正答：エ

ア：ドライバは主に呼出し側を模擬するため用途が逆である。

イ：本番への無統制接続は安全・テストデータの観点で不適切である。

ウ：代替物を使えば依存部分を待たずに一部結合確認が可能である。

エ：呼び出される側を模擬するスタブにより、上位側の制御・異常処理を先行検証できる。

総合解説：段階的結合では未完成要素をスタブやドライバで代替し、最終的には実物同士で再検証する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0041

詳細設計・結合・テスト > システム結合・インタフェーステスト | 難易度：基礎

注文登録APIで、応答がタイムアウトしたため呼出し側が再試行したところ、同じ注文が二重登録された。結合テストとして最も重要な追加ケースはどれか。

- ア．処理完了後に応答だけ失われた状況を再現し、同一要求の再送で二重登録されないことを確認する。
- イ．正常応答時の一回だけの登録件数を増やして測定する。
- ウ．ネットワーク障害はインフラ担当の範囲なのでアプリケーション結合テストから除外する。
- エ．再試行回数を無制限にして成功するまで待つ。

答え・解説

正答：ア

ア：部分失敗時の再送は分散システム特有の重要シナリオであり、冪等性や重複排除を検証する。

イ：正常系だけでは問題を再現できない。

ウ：ネットワーク失敗に対するアプリの振る舞いはインタフェース契約の一部である。

エ：無制限再試行は負荷と重複処理を悪化させる。

総合解説：インタフェーステストでは成功・明示的エラーだけでなく、遅延、応答消失、途中切断、再送など時間的な失敗も確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0042

詳細設計・結合・テスト > システム結合・インタフェーステスト | 難易度：標準

API v2を提供するが、一部利用システムは3か月間v1を使い続ける。結合テスト計画として最も適切なものはどれか。

- ア．提供側がv2で動けばv1利用側のテストは不要とする。
- イ．共存期間に許容するv1/v2の組合せを明示し、代表利用システムで後方互換性と移行手順を検証する。
- ウ．v2公開と同時にv1を停止し、利用側に即日改修を要求する。
- エ．バージョン番号だけ変え、契約差分は文書化しない。

答え・解説

正答：イ

ア：提供側単独では利用側との互換性を確認できない。

イ：実際に共存する版の組合せをテストし、互換性と移行期間を保証する必要がある。

ウ：合意された移行期間に反する。

エ：変更点が追跡できず、障害解析が困難になる。

総合解説：結合テストは実運用で生じる構成・バージョンの組合せを対象にし、サポート範囲を明確にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0043

詳細設計・結合・テスト>システム結合・インタフェーステスト | 難易度：基礎

受注、在庫、配送、請求の各サブシステムは個別の結合テストに合格した。システム全体として追加すべき確認はどれか。

ア．各サブシステムの単体テストをもう一度同じ条件で実施するだけでよい。

イ．画面表示だけを確認し、裏側の配送・請求状態は確認しない。

ウ．一つの受注が各システムを通り、状態・データ・例外時の補償まで一貫する代表的な業務フローを端から端まで確認する。

エ．全外部連携をスタブのままにして、本物同士の確認は本番開始後に行う。

答え・解説

正答：ウ

ア：単体テストの再実施は横断連携の品質を追加検証しない。

イ：後続システムの状態不整合を見逃す。

ウ：局所的に正しくても全体の業務状態が矛盾する可能性があるためE2E確認が必要である。

エ：最終的には実際の連携構成で検証する必要がある。

総合解説：システム結合では構成品目だけでなく手作業や他システムを含む全体として、業務要件に沿う処理を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0044

詳細設計・結合・テスト>システム結合・インタフェーステスト | 難易度：標準

複数システムの結合テストで、顧客マスタのコード体系が環境ごとに異なり、エラーが多発した。改善として最も適切なものはどれか。

ア．各システムが独自にテストデータを作り、コード差は手作業で都度読み替える。

イ．本番データを無加工でコピーすれば意味の整合も自動的に保証されるとする。

ウ．テスト失敗時だけ対象コードをDBで直接書き換え、変更履歴を残さない。

エ．結合対象全体で整合するマスタ・トランザクションデータを設計し、前提データの版と初期化手順を管理する。

答え・解説

正答：エ

ア：手作業読み替えは再現性と原因分析を損なう。

イ：機密性や環境差の問題があり、単純コピーは適切でない。

ウ：無記録変更はテスト証跡を壊す。

エ：結合テストではシステム間で意味が一貫したデータセットと再現可能な初期状態が必要である。

総合解説：システム適格性確認の準備でもマスタやトランザクションデータの作成・登録が重視される。結合段階からデータ前提を構成として管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0045

詳細設計・結合・テスト>システム結合・インタフェーステスト | 難易度：応用

倉庫システムでは、バーコード端末、無線LAN、在庫サーバ、作業者の手順が一体で業務を実現する。結合テストで最も適切な観点はどれか。

ア．端末入力から通信、在庫更新、エラー表示、作業者の復旧手順までを実運用に近い組合せで検証する。

イ．在庫サーバのAPIだけが正しければ、端末や作業手順は結合テスト対象外とする。

ウ．作業者の操作ミスは教育の問題なので、システムテストでは想定しない。

エ．無線障害はネットワーク機器の単体試験だけで十分とする。

答え・解説

正答：ア

ア：システムはソフトウェアだけでなく、ハードウェア、他システム、人の作業を含むため全体連携を検証する。

イ：業務実現に必要な他要素との結合不良を見逃す。

ウ：実運用で起こり得る操作・復旧もシステム適格性に関わる。

エ：通信障害時の業務挙動は全体として確認すべきである。

総合解説：SAのシステム結合はソフトウェア構成品目、ハードウェア構成品目、手作業、必要に応じ他システムを結合して評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0046

詳細設計・結合・テスト>システム結合・インタフェーステスト | 難易度：標準

結合テストで「注文登録が時々失敗する」現象が発生した。複数サービスが関与しており再現率も低い。最初の対応として最も適切なものはどれか。

ア．原因候補の全サービスを同時に書き換えて再テストする。

イ．相関ID、時刻、入力条件、各サービスのログと設定版を揃え、失敗経路を再現・比較して境界を絞り込む。

ウ．再現率が低いので欠陥ではないと判断して終了する。

エ．最後にログを出したサービスを原因と決めつける。

答え・解説

正答：イ

ア：同時変更するとどの修正が効いたか分からなくなる。

イ：観測情報と構成を固定して事実を集め、原因候補を段階的に狭めるのが適切である。

ウ：低頻度でも重大影響があれば評価が必要である。

エ：最後のログと根本原因が一致するとは限らない。

総合解説：結合テストでは不具合を識別し、状況を調査・分析し、是正結果を記録する。再現条件と対象構成を揃えることが重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0047

詳細設計・結合・テスト>システム結合・インタフェーステスト | 難易度：基礎

結合テストケースが800件あり全件合格した。これだけで「システム要件を十分にテストした」とは言えない理由として最も適切なものはどれか。

ア．800件を超えれば自動的に網羅性100%になるため、実際には十分と言える。

イ．テストは件数だけが品質指標なので、要件との対応は不要である。

ウ．件数ではなく、各システム要件とリスクに対応するテストケースがあり、重要な正常・異常経路を網羅しているかを確認する必要があるため。

エ．システム要件は設計時に確認済みなので、結合テストで追跡する必要はない。

答え・解説

正答：ウ

ア：閾値だけで網羅性は決まらない。

イ：件数だけでは重複ケースばかりでも高評価になってしまう。

ウ：テストの量と要求カバレッジは別であり、追跡性とリスクに基づく評価が必要である。

エ：結合結果はシステム要件に対して評価される。

総合解説：システム結合の評価では要件のテスト網羅性、期待結果への適合、方法・標準の適切性、後続適格性確認の実現可能性などを見る。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0048

詳細設計・結合・テスト>システム結合・インタフェーステスト | 難易度：標準

共通認証APIのトークン形式を変更した。直接利用する3システムだけでなく、その下流にある業務フローにも影響し得る。再テスト範囲の決め方として最も適切なものはどれか。

ア．変更した認証APIの単体テストだけで十分とする。

イ．安全のため全システムの全テストを必ず毎回実施し、影響分析は行わない。

ウ．変更箇所の担当者が問題ないと言えば再テストしない。

エ．依存関係と変更内容を分析し、直接インタフェース、認証エラー処理、代表E2Eフローなど影響が合理的に及ぶ範囲を回帰テストする。

答え・解説

正答：エ

ア：利用側との契約破壊や下流影響を検出できない。

イ：全件再実施が必要な場合もあるが、常に一律では費用対効果が悪い。

ウ：主観だけでは変更影響を評価できない。

エ：影響分析に基づき直接・間接依存へ必要な回帰テストを選ぶのが効率と品質のバランスに優れる。

総合解説：結合後の変更では構成・依存関係・要件追跡を使って回帰範囲を決め、変更による既存機能破壊を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0049

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：標準

システム適格性確認テストの目的として最も適切なものはどれか。

- ア．指定されたシステム要件に実装が適合していることを確認し、納入準備ができているか評価する。
- イ．取得者が契約条件に基づいて最終的な受入れ判断だけを行う。
- ウ．個々のプログラムユニットの内部ロジックだけを確認する。
- エ．稼働後の投資効果を定期的に測定する。

答え・解説

正答：ア

ア：適格性確認はシステム要件への実装適合と納入可能性を検証する工程である。

イ：これは取得者の受入れ活動の説明に近い。

ウ：ユニットテストの範囲である。

エ：運用・効果評価の範囲である。

総合解説：SAシラバスでは、各システム要件について実装の適合性をテストし、納品準備ができていることを確実にする活動としている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0050

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：基礎

要件に「ピーク時でも95パーセンタイル応答時間2秒以内」とある。適格性確認テストケースとして最も適切なものはどれか。

- ア．利用者1人で1回だけ操作し、平均応答時間が2秒以内なら合格とする。
- イ．想定ピークの同時利用・データ量を再現し、測定区間と95パーセンタイルの算出方法を定めて2秒以内か判定する。
- ウ．CPU使用率だけを測定し、応答時間は測らない。
- エ．負荷条件を記録せず、担当者の体感で速ければ合格とする。

答え・解説

正答：イ

ア：統計指標と負荷条件が要求と一致しない。

イ：要件の負荷条件、統計量、閾値をそのまま検証可能なテストへ落とし込む。

ウ：資源使用率は原因分析には有用だが、応答時間要件の代替ではない。

エ：再現性・客観性がない。

総合解説：適格性確認では入力、期待出力、テスト基準を要件から定義し、結果が要求を満たすか客観的に判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0051

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：応用

通常ピークの2倍以上まで負荷を上げ、どこで性能劣化やエラーが起きるか限界を把握したい。最も適したテストはどれか。

ア．通常ピーク条件だけでSLA達成を確認する負荷テストだけを行う。

イ．24時間一定負荷で資源リークを確認する長時間テストだけを行う。

ウ．ストレステストとして、想定範囲を超えて段階的に負荷を上げ、破綻点と回復挙動を確認する。

エ．ソースコードを実行せずにレビューする静的解析だけを行う。

答え・解説

正答：ウ

ア：通常条件の性能確認には有効だが限界把握が主目的ではない。

イ：持続性の確認が主目的である。

ウ：限界点や破綻時の挙動を見る目的には、想定を超える負荷を与えるストレステストが適する。

エ：実行時の負荷限界は静的解析だけでは測れない。

総合解説：性能テストは目的を明確にし、通常負荷、ピーク、限界、長時間、スケーリングなど異なる観点を組み合わせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0052

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：標準

短時間の負荷試験では問題ないが、本番で数日後にメモリ不足になる懸念がある。適切なテストはどれか。

ア．最大負荷を5秒だけ与え、落ちなければ問題なしとする。

イ．画面の表示崩れだけを確認する。

ウ．メモリ不足はOSの問題なのでアプリケーションのテスト対象外とする。

エ．実運用に近い負荷を長時間継続し、メモリ、接続数、キューなどの資源推移と性能劣化を観測する。

答え・解説

正答：エ

ア：瞬間的な最大負荷では時間依存の劣化を見つけにくい。

イ：対象リスクと関係がない。

ウ：アプリケーションの資源解放不良なども原因になり得る。

エ：リークや蓄積は時間とともに顕在化するため、長時間の安定性確認が必要である。

総合解説：性能・信頼性要件に応じて、時間軸を含むテストを設計し、単一指標でなく資源と応答の変化を併せて評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0053

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：基礎

「一般担当者は他部署の顧客情報を閲覧できない」という要件を確認するセキュリティテストとして最も適切なものはどれか。

ア．一般担当者権限で他部署IDを直接指定するなど許可されない操作を試し、サーバ側で拒否され監査記録も残ることを確認する。

イ．管理者権限で他部署情報を閲覧できることだけを確認する。

ウ．メニューに他部署検索ボタンが表示されないことだけを確認する。

エ．パスワードの文字数だけを確認し、認可処理は対象外とする。

答え・解説

正答：ア

ア：認可はUI表示ではなくサーバ側のアクセス制御として否定的ケースを含めて検証する必要がある。

イ：管理者の正常系では一般権限の制約を確認できない。

ウ：URLやAPIを直接呼ばれた場合の制御を保証しない。

エ：認証強度と認可は異なる要件である。

総合解説：セキュリティテストは脆弱性探査だけでなく、定義されたセキュリティ要件・制御が期待どおり働くかを検証する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0054

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：標準

可用性要件で「主系障害時に5分以内でサービス再開」と定めている。テストとして最も適切なものはどれか。

ア．待機系が起動している画面を確認するだけで合格とする。

イ．主系停止を計画的に発生させ、検知から切替え、データ整合性確認、サービス再開までの時間を測定する。

ウ．障害を起こすと危険なので、設計書レビューだけで5分以内とみなす。

エ．主系のCPU性能だけを測定する。

答え・解説

正答：イ

ア：実際に切替えられるか、時間要件を満たすかを確認できない。

イ：要件で規定された障害シナリオを安全に再現し、復旧時間と整合性を実測する必要がある。

ウ：レビューは重要だが実行時挙動の証拠にはならない。

エ：対象は復旧であり通常性能とは別である。

総合解説：可用性・信頼性の適格性確認では、障害注入、切替え、バックアップ・リストア等を要件とリスクに沿って検証する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0055

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：標準

負荷試験で応答時間が急増した。APサーバCPUは30%、DB CPUは85%、DBのI/O待ちも高い。次の調査として最も適切なものはどれか。

ア．APサーバのCPUを増設すれば必ず解決すると判断する。

イ．利用者画面の色を変更して再テストする。

ウ．遅いSQL、実行計画、I/O、ロック待ちなどDB側の内訳を計測し、応答時間との相関からボトルネックを絞る。

エ．平均応答時間だけを見て、サーバ資源の計測は停止する。

答え・解説

正答：ウ

ア：AP CPUには余裕があり、根拠が弱い。

イ：性能原因と関係しない。

ウ：観測値がDB側の飽和を示しているため、詳細メトリクスで原因を段階的に絞るのが合理的である。

エ：複数指標を関連付けることで原因分析ができる。

総合解説：性能テストでは合否だけでなく、資源・待ち時間・処理量を測定し、負荷増加に伴う飽和点と原因を分析する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0056

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：応用

性能テスト環境が本番の半分のCPU、10分の1のデータ量である。結果を本番性能の根拠にする場合の対応として最も適切なものはどれか。

ア．環境が小さい分だけ応答時間を単純に2倍すれば本番値になると決める。

イ．データ量は性能へ影響しないとみなし、差異を記録しない。

ウ．テスト環境の方が小さいので、合格すれば本番も必ず合格とする。

エ．差異を定量化し、スケーリングできない要素を評価した上で、必要なら本番相当構成・データ量で再試験する。

答え・解説

正答：エ

ア：性能は単純比例しない場合が多い。

イ：索引、キャッシュ、I/Oなどデータ量の影響が大きい。

ウ：ボトルネック構造が異なれば逆の結果もあり得る。

エ：環境差の影響は要素ごとに異なるため、代表性と推定根拠を評価する必要がある。

総合解説：性能テストの信頼性は負荷モデル、データ、構成、ネットワークなどの代表性に依存する。差異を明示し、合否判断に耐える環境を用意する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0057

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：基礎

本番相当環境で侵入テストを行う。計画上、最も重要な事項の一つはどれか。

- ア．対象範囲、許可された手法・時間帯、停止条件、連絡先、データ取扱いを事前合意して実施する。
- イ．攻撃手法は事前に知らせると意味がないので、対象範囲も責任者も定めない。
- ウ．本番データを自由に外部へ持ち出して解析する。
- エ．テスト中の障害は全て実環境の脆弱性なので、復旧手順を用意しない。

答え・解説

正答：ア

ア：技術的セキュリティ評価はシステムへ影響を与え得るため、範囲・安全策・権限・証跡を明確にする。

イ：無許可範囲への試験は法的・運用上の問題になり得る。

ウ：機密データは適切に保護・取扱いを制御する必要がある。

エ：インシデント発生時の停止・復旧計画が必要である。

総合解説：NIST SP 800-115でも、セキュリティ評価は計画、実施、結果分析、データ取扱い、役割責任を含めて安全に行うことが重視される。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0058

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：標準

適格性確認テストで軽微な画面表示不具合5件と、低頻度だが決済が二重になる可能性のある不具合1件が残った。リリース判断として最も適切なものはどれか。

- ア．合計6件なので、10件未満という件数基準だけで合格にする。
- イ．件数だけでなく影響度、発生条件、回避策、要求違反、修正リスクを評価し、重大不具合は受容可否を権限者が判断する。
- ウ．発生頻度が低い不具合は影響に関係なく無視する。
- エ．軽微な5件より件数が少ないため、二重決済不具合の優先度を下げる。

答え・解説

正答：イ

ア：単純件数は重大度を反映しない。

イ：残存不具合はリスクで評価し、重大性と要求適合性に基づいて出荷可否を判断する。

ウ：低頻度でも影響が致命的なら許容できない場合がある。

エ：件数の多寡とビジネス影響は一致しない。

総合解説：適格性確認後の評価では、テスト網羅性、期待結果への適合、残存不具合の影響、運用・保守実現性などを総合する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0059

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：基礎

夜間の自動E2Eテストで毎回2～3%が不安定に失敗し、担当者が「いつもの失敗」として再実行で通している。適切な対応はどれか。

ア．再実行で一度でも成功すれば常に合格とする。

イ．不安定なケースは全て削除し、テスト件数だけ維持する。

ウ．不安定な原因を分析し、テスト環境・同期・データ依存を修正して、失敗が製品欠陥かテスト欠陥か判別できる状態にする。

エ．自動テストは人手より正確なので、失敗原因の分析は不要とする。

答え・解説

正答：ウ

ア：偶然の成功が品質証明になり、見逃しを生む。

イ：重要な要件カバレッジが失われる可能性がある。

ウ：フレークが常態化すると真の欠陥を見逃すため、テストそのものの信頼性を回復する必要がある。

エ：自動化にも環境やテスト設計の欠陥があり得る。

総合解説：自動テストツールは品質保証を支える手段であり、テスト手順・データ・環境・結果の妥当性を評価して使う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0060

詳細設計・結合・テスト > 適格性確認・性能・セキュリティテスト | 難易度：標準

適格性確認テストの終了基準として最も適切なものはどれか。

ア．予定日になった時点で未実施ケースがあっても自動終了する。

イ．テストケース数が1000件を超えたら合否に関係なく終了する。

ウ．重大不具合が残っていても、平均合格率90%なら終了する。

エ．重要要件の網羅、必須ケース合格、重大不具合の解消または承認された残余リスク、結果文書化など複数条件を明示する。

答え・解説

正答：エ

ア：日付は制約であり品質達成の証拠ではない。

イ：件数だけでは網羅性・重要度を示さない。

ウ：重大欠陥の存在を平均値で相殺してはいけない。

エ：終了基準は要件・リスク・欠陥・証跡を組み合わせ、納入準備ができたことを説明可能にする必要がある。

総合解説：テスト計画には開始・終了条件、判定基準、未解決事項の扱いを定義し、結果を文書化して次工程へ引き継ぐ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0061

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：基礎

基幹システムを休日夜間に切り替える導入計画で、最も重要な記載事項の組合せはどれか。

ア．作業順序、担当・連絡経路、前提条件、確認項目、停止条件、切戻し手順、必要資源を明確にする。

イ．作業担当者の氏名だけを記載し、手順と判定条件は現場判断に任せる。

ウ．正常に終わる前提で切戻し手順を省略する。

エ．導入作業の開始時刻だけを決め、完了確認方法は定めない。

答え・解説

正答：ア

ア：導入は短時間に多くの依存作業を行うため、順序・責任・判定・復旧を具体化する必要がある。

イ：担当だけでは作業の再現性や判断基準がない。

ウ：重大障害時の業務継続策がなくなる。

エ：終了判定ができず、次作業へ安全に進めない。

総合解説：SAシラバスでは導入に必要な資源・情報を決め、既存影響を最小化する計画を作成し文書化することが求められる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0062

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：標準

本番導入当日に、必要なネットワーク許可設定が未申請であることが判明した。再発防止策として最も適切なものはどれか。

ア．導入担当者が当日に不足設定を見つけたら都度申請する。

イ．導入前チェックリストに環境・権限・容量・外部接続・証明書等の前提条件と確認期限・責任者を設ける。

ウ．アプリケーションが完成していればインフラ前提は確認しなくてよい。

エ．ネットワーク設定は外部部署の責任なので導入計画から除外する。

答え・解説

正答：イ

ア：当日対応は変更待ちで停止するリスクが高い。

イ：依存する前提を事前確認し、未達を導入前に止める仕組みが有効である。

ウ：システム導入には環境全体の準備が必要である。

エ：責任分担が別でも、プロジェクト計画上の依存関係として管理する。

総合解説：導入計画はソフトウェア配置手順だけではなく、動作に必要な資源・情報・外部条件が利用可能であることまで確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0063

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：応用

24時間サービスで停止可能時間が15分しかない。DBスキーマ変更を伴うリリース方式として最も適切な検討はどれか。

ア．停止時間を無視し、全データ変換が終わるまでサービスを止める。

イ．本番で初めて変更SQLを実行し、所要時間を測る。

ウ．互換期間を設ける段階的スキーマ変更や事前データ変換を検討し、15分内で切替え・検証・切戻し可能かリハーサルする。

エ．切替え時間が足りなければ、その場で検証工程を省略する。

答え・解説

正答：ウ

ア：要件違反となる。

イ：本番初回実行は時間超過や失敗リスクが高い。

ウ：厳しい停止制約では作業を事前化・分割し、実測で時間と切戻しを確認する必要がある。

エ：検証省略は誤った状態でサービス再開する危険がある。

総合解説：導入計画は業務制約、作業所要時間、依存関係、復旧可能性を考慮し、必要なら方式そのものを変更する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0064

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：標準

新リリースはDB更新を伴い、一度変換すると旧版が同じデータを読めない。導入計画で最も適切な対応はどれか。

ア．アプリケーションファイルだけ旧版へ戻せば必ず切戻せるとする。

イ．切戻しが難しいことは計画に記載せず、成功する前提で実施する。

ウ．DB更新後に問題が出た場合は利用者データを削除してやり直す。

エ．旧版互換性を含む逆変換・バックアップ復元・前方修正など現実的な復旧方式を決め、切戻し可能時間と判断条件を明確にする。

答え・解説

正答：エ

ア：DBが旧版非互換ならアプリだけ戻しても動作しない。

イ：不可逆性は重大な導入リスクとして共有すべきである。

ウ：業務データの安易な削除は許容できない。

エ：データ互換性を含めて復旧方式を設計し、不可逆点を明示する必要がある。

総合解説：切戻しは単なる旧バイナリ配置ではなく、データ・設定・外部連携を含むシステム状態を戻せるかで判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0065

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：基礎

APIサーバは新DBスキーマを前提とし、画面は新APIを前提とする。安全な導入順序を決める際の考え方として最も適切なものはどれか。

ア．各版の互換関係を整理し、途中状態でもサービス可能な順序または一時互換層を設計してから切替える。

イ．画面、API、DBの順序をランダムに決める。

ウ．全担当が同時刻に独立して更新し、完了時刻だけ合わせる。

エ．途中状態は数分なので動かなくても問題ないと無条件に判断する。

答え・解説

正答：ア

ア：導入中の中間構成も実在するため、依存・互換性を考慮した順序が必要である。

イ：依存を無視すると不整合な構成が生まれる。

ウ：同時作業でも完了順は保証されず、障害切分けも難しい。

エ：サービス要件やトランザクションに影響する可能性がある。

総合解説：導入計画では作業順序をシステム依存関係と互換性から導き、中間状態・検証ポイントを定義する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0066

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：標準

本番導入用ランブックに求められる内容として最も適切なものはどれか。

ア．「通常どおり導入する」の一文だけを記載する。

イ．各手順の実行条件、コマンドや操作、期待結果、確認方法、異常時の分岐、担当を第三者が追える形で記載する。

ウ．担当者の経験があれば文書は不要とする。

エ．正常系の操作だけを書き、異常時は電話で相談することだけ定める。

答え・解説

正答：イ

ア：操作と判定の再現性がない。

イ：具体的な実行・確認・分岐があれば再現性と引継ぎ性を高められる。

ウ：属人化し、緊急時や交代時に弱い。

エ：異常時こそ事前に停止・切戻し判断を定義する必要がある。

総合解説：導入文書は作業者の記憶補助ではなく、手順・責任・証跡を標準化し、安全な実施と監査を支える。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0067

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：応用

導入前にDBバックアップを取得する計画がある。これだけで切戻し対策として十分と言えない理由はどれか。

ア．バックアップファイルが存在すれば復元は必ず成功するため、十分である。

イ．バックアップはデータ容量が大きいほど品質が高いので、復元試験は不要である。

ウ．バックアップが復元可能か、復元所要時間が許容内か、アプリ・設定との整合が取れるかまで確認する必要があるため。

エ．切戻し時はDBだけ戻せば、外部システムとの処理差分は無視できるため。

答え・解説

正答：ウ

ア：ファイル存在は完全性や復元可能性を保証しない。

イ：容量と復元品質は直接対応しない。

ウ：復旧は取得だけでなく復元可能性・時間・システム整合性で評価する。

エ：外部連携済みトランザクションの整合も重要である。

総合解説：導入時のバックアップは保険であり、実際に使えることを検証し、RTOやデータ整合を満たす復旧手順にする必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0068

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：基礎

大規模切替えでアプリ、DB、ネットワーク、業務部門が同時に作業する。導入体制として最も適切なものはどれか。

ア．各領域が独立に完了判断し、全体状況を集約する役割は置かない。

イ．技術担当だけで切替え判断を行い、業務部門には終了後に通知する。

ウ．障害時の連絡先は事前に決めず、チャットで反応した人が対応する。

エ．全体指揮者、領域責任者、Go/No-Go判断者、障害連絡経路を定め、各チェックポイントで情報を集約する。

答え・解説

正答：エ

ア：部分最適の判断が全体不整合を招く。

イ：業務再開可否は技術状態だけで決められない。

ウ：重大時に連絡・判断が遅れる。

エ：複数領域の依存を統合して意思決定できる指揮・責任構造が必要である。

総合解説：導入計画では作業だけでなく、情報の集約、意思決定権限、エスカレーションを明確にして混乱を防ぐ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0069

導入・受入れ > システム導入計画 | 難易度：標準

全社展開前に一部拠点だけで新システムを稼働させるパイロット導入の主な利点として最も適切なものはどれか。

ア．実運用に近い環境で業務・性能・教育・運用手順の問題を限定範囲で発見し、全社展開計画へ反映できる。

イ．パイロットが成功すれば、他拠点のネットワーク・業務差異を確認しなくても全社成功が保証される。

ウ．パイロット中は正式な監視や障害記録を行わなくてよい。

エ．パイロットはテストではないので、受入れ基準や切戻し条件を設けない。

答え・解説

正答：ア

ア：影響範囲を限定しつつ実運用上の学びを得られる点が利点である。

イ：拠点差があれば追加検証が必要で、成功を一般化できない。

ウ：学習を得るには観測と記録が必要である。

エ：本番利用である以上、判定・復旧条件が必要である。

総合解説：パイロット導入は段階リリースの一形態であり、代表性と限定範囲を理解して、得られた結果を次段階へ反映する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0070

導入・受入れ > データコンバージョン・並行運用 | 難易度：標準

旧システムの性別コードが「1/2」、新システムが「M/F/X」である。データ移行設計として最も適切なものはどれか。

ア．1をM、2をFと担当者が口頭で決め、例外データは無視する。

イ．旧値ごとの変換規則、未定義値の扱い、件数・値分布の照合方法を定め、変換結果を検証する。

ウ．型が文字列に変わるだけなので業務部門の確認は不要とする。

エ．変換後の件数だけ一致すれば、値の意味は確認しなくてよい。

答え・解説

正答：イ

ア：口頭ルールは追跡・再現できず例外を見逃す。

イ：データ意味を明示した変換規則と例外処理、移行後照合を定義する必要がある。

ウ：業務意味の変更を伴うため利用部門との合意が重要である。

エ：件数一致でも誤った値へ変換され得る。

総合解説：データコンバージョンは形式変換だけでなく意味の対応、品質、例外、照合を設計し、再現可能な手順として管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0071

導入・受入れ > データコンバージョン・並行運用 | 難易度：基礎

旧顧客DBには重複顧客、存在しない郵便番号、必須項目欠落が多数ある。移行方針として最も適切なものはどれか。

ア．不正データも全件そのまま移行し、新システム側でエラーになったものだけ後日直す。

イ．移行担当者が業務確認なしで重複レコードを任意に削除する。

ウ．新システムの受入れ基準に照らして品質ルールを定め、業務責任者と重複統合・補正・除外の判断を行い、履歴を残す。

エ．データ件数を減らさないことを最優先し、品質問題は無視する。

答え・解説

正答：ウ

ア：新システムの制約違反や業務障害を持ち込む。

イ：正しい顧客を削除するなど業務上の誤りになり得る。

ウ：業務意味に関わる補正はルールと責任者を明確にし、監査可能に行う必要がある。

エ：件数維持はデータ品質の目的ではない。

総合解説：移行は旧システムの欠陥をそのまま複製する作業ではない。移行対象・変換・クレンジング・例外処理を業務側と合意する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0072

導入・受入れ > データコンバージョン・並行運用 | 難易度：応用

初回移行リハーサルで、予定4時間に対し7時間かかった。最も適切な対応はどれか。

ア．本番では担当者が慣れて速くなると期待し、計画時間は4時間のままにする。

イ．時間超過を隠すため、移行後検証工程を削除する。

ウ．リハーサル結果は本番と無関係なので記録しない。

エ．工程別実績を分析してボトルネックを特定し、並列化・事前処理・ツール改善を行い、再リハーサルで時間と品質を確認する。

答え・解説

正答：エ

ア：根拠のない楽観は停止時間超過リスクを残す。

イ：品質検証を削ると誤移行を見逃す。

ウ：学習機会を失う。

エ：リハーサルは本番計画を検証するためのものであり、実績から改善して再確認する。

総合解説：SAシラバスでも移行リハーサル、問題予測と事前対策、移行検証が移行計画の重要項目として挙げられている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0073

導入・受入れ > データコンバージョン・並行運用 | 難易度：標準

全データコピーに12時間かかるが、許容停止時間は30分である。適切な移行方式の検討はどれか。

ア．事前に初回コピーを行い、変更履歴やCDC等で差分を追跡し、切替え時に最終差分適用・更新停止・整合確認を行う方式を評価する。

イ．本番停止後に12時間の全件コピーを開始する。

ウ．停止時間を守るため、移行後の差分データを捨てる。

エ．旧新双方の更新を無制御で許可し、後日どちらか新しい方を採用する。

答え・解説

正答：ア

ア：大量データでは事前コピーと差分同期を使い、短い切替え時間へ圧縮する方法が有効である。

イ：停止要件を満たせない。

ウ：データ欠落となる。

エ：競合解決規則がなく整合性を保証できない。

総合解説：差分移行では更新凍結点、差分取得の完全性、適用順序、最終照合を設計し、取りこぼしや二重適用を防ぐ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0074

導入・受入れ > データコンバージョン・並行運用 | 難易度：基礎

給与計算を1か月だけ旧新システムで並行運用する。並行運用で最も重要な管理の一つはどれか。

ア．旧新の結果が異なっても新システムを常に正しいとみなす。

イ．同一入力に対する計算結果を項目単位で照合し、差異の許容範囲、原因分類、正式記録の決定方法を定める。

ウ．総支給額の全社員合計だけ一致すれば個人別差異は確認しない。

エ．並行期間中は二重作業なので、差異記録は残さない。

答え・解説

正答：イ

ア：新側にも欠陥があり得るため根拠がない。

イ：並行運用は新システムの業務結果を旧運用と比較する機会であり、差異を体系的に判断する必要がある。

ウ：個人別の重大差異が総額で相殺される可能性がある。

エ：差異分析の証拠がなければ切替え判断に使えない。

総合解説：並行運用ではどちらを正式記録とするか、データ投入をどう同期するか、結果差をどう判定・是正するかを事前に定める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0075

導入・受入れ > データコンバージョン・並行運用 | 難易度：標準

顧客100万件と注文5000万件を移行した。移行後検証として最も適切なものはどれか。

ア．顧客件数だけ一致すれば注文データも正しいとみなす。

イ．ファイルサイズが旧DBと近ければ移行成功と判断する。

ウ．件数・合計値に加え、注文の顧客参照、主要コード、サンプル明細、例外件数など関係整合性も検証する。

エ．SQLがエラーなく終了したことだけを確認する。

答え・解説

正答：ウ

ア：注文側の欠落・誤参照を検出できない。

イ：格納方式が異なればファイルサイズは比較指標にならない。

ウ：移行の正しさは量だけでなくデータ間関係と業務意味でも確認する必要がある。

エ：処理成功とデータ正当性は別である。

総合解説：移行検証は複数の独立した照合方法を用い、欠落・重複・誤変換・参照不整合を検出できるようにする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0076

導入・受入れ > データコンバージョン・並行運用 | 難易度：応用

新システム稼働後1週間は重大障害時に旧システムへ戻せるようにしたい。最も適切な方針はどれか。

ア．新稼働開始と同時に旧DBを削除し、バックアップも廃棄する。

イ．旧環境を起動可能にしておけば、データ同期なしでもいつでも安全に戻れるとみなす。

ウ．切戻し判断は障害発生時の担当者の勘に任せる。

エ．旧環境を必要期間保持し、新稼働後の更新データを旧側へどう反映するか、または戻れない時点を明確にして切戻し手順を検証する。

答え・解説

正答：エ

ア：切戻し・監査・参照の可能性を失う。

イ：新側だけに発生した取引が失われる可能性がある。

ウ：判断基準と権限者を事前に定めるべきである。

エ：旧環境の保持だけでなく、新稼働後データとの整合と不可逆点を管理する必要がある。

総合解説：SAシラバスでは移行後の旧運用環境支援や旧環境関連データの保持・安全性確保も扱う。切戻し可能性はデータ同期を含めて設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0077

導入・受入れ > データコンバージョン・並行運用 | 難易度：標準

旧システム廃止後も、監査のため7年間は過去取引を参照できる契約要件がある。移行・廃止設計として最も適切なものはどれか。

- ア．必要データを検索可能な形で安全に保持し、アクセス権、監査ログ、保管期間、廃棄方法を定める。
- イ．新システムへ移行したので旧データは全て直ちに削除する。
- ウ．バックアップ媒体を保管するだけで、復元方法や検索手段は確認しない。
- エ．監査担当者全員へ管理者権限を付与して参照を簡単にする。

答え・解説

正答：ア

ア：「アクセス可能な状態」の要件を満たしつつ、保護と監査性を設計する必要がある。

イ：契約上の保持要件に違反する。

ウ：復元できなければ必要時に利用できない。

エ：過剰権限は保護要件に反する。

総合解説：旧環境関連データは保持期間中も情報資産であり、可読性・検索性・権限・監査・廃棄までライフサイクルで管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0078

導入・受入れ > 受入れテスト・納入・教育 | 難易度：基礎

供給者の適格性確認テストは全て合格した。取得者が受入れテストで確認すべきこととして最も適切なものはどれか。

- ア．供給者テストが合格しているので、取得者側の確認は一切不要である。
- イ．契約・受入れ基準と実際の業務利用の観点から、必要な業務シナリオ、成果物、運用条件を確認して受入れ判断する。
- ウ．ソースコードの行数だけを確認して受入れを決める。
- エ．契約に記載のない新機能をその場で追加要求し、未実装なら不合格にする。

答え・解説

正答：イ

ア：適格性確認結果は考慮するが、受入れ責任を代替しない。

イ：受入れは取得者が合意済み基準に照らして納入物を受け取れるか判断する活動である。

ウ：行数は契約適合や業務有効性を示さない。

エ：新規要求は変更管理の対象であり受入れ基準へ無断追加しない。

総合解説：SAシラバスでは取得者の受入れレビュー・テストを支援し、共同レビュー、監査、適格性確認結果を考慮して結果を文書化する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0079

導入・受入れ > 受入れテスト・納入・教育 | 難易度：標準

システム適格性確認テストと受入れテストの関係として最も適切なものはどれか。

ア．両者は名称が違っただけで、必ず同一担当者が同一ケースを実施する。

イ．受入れテストは供給者が自社内部でのみ行い、取得者は関与しない。

ウ．適格性確認はシステム要件への実装適合と納入準備を確認し、受入れは取得者が契約・業務観点で受け入れるか判断する。

エ．適格性確認は稼働後の投資効果を評価する活動である。

答え・解説

正答：ウ

ア：ケースが重なる場合はあっても役割と目的は同一ではない。

イ：受入れは取得者側の活動であり供給者は支援する。

ウ：目的と主体が異なり、適格性確認結果は受入れ判断の重要な入力になる。

エ：それは運用後評価の説明である。

総合解説：開発側の品質確認と取得者の契約上の受領判断を区別することで、責任と証拠を明確にできる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0080

導入・受入れ > 受入れテスト・納入・教育 | 難易度：応用

本番システムの納入時に、実行モジュールだけを渡せば十分だという意見が出た。最も適切な判断はどれか。

ア．実行モジュールが動けば関連文書の版は問わない。

イ．保守に必要な資料は障害が起きてから作ればよい。

ウ．納入物の一覧は作らず、担当者のPCから必要そうなファイルをコピーする。

エ．契約に従い、実行物に加えて設定、導入手順、利用者・運用・保守文書、必要なライセンス情報等を整合した版で構成して納入する。

答え・解説

正答：エ

ア：文書と実体の不一致は運用事故を招く。

イ：引継ぎ時点で保守可能性を確保すべきである。

ウ：構成漏れ・誤版を防げない。

エ：納入はシステムを運用・保守可能な状態で引き渡す活動であり、関連成果物の版整合が必要である。

総合解説：納入可能な製品・システムは、契約で要求された形式と構成に整理し、運用・保守への引継ぎ成果物も準備する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0081

導入・受入れ > 受入れテスト・納入・教育 | 難易度：標準

開発チームから運用チームへの引継ぎで、最も適切な内容はどれか。

ア．構成図、監視項目、通常・障害時手順、既知制約、バックアップ復旧、連絡先、変更・リリース方法を実機演習やレビューと併せて移管する。

イ．完成したソースコードだけを共有し、運用手順は運用チームに推測してもらう。

ウ．障害対応情報は開発者だけが保持し、問い合わせが来たときだけ口頭で伝える。

エ．監視設定は本番稼働後に運用チームがゼロから考える。

答え・解説

正答：ア

ア：運用・保守に必要な成果物と暗黙知を体系化し、実際に実施できることを確認する。

イ：運用要件や復旧手順が欠ける。

ウ：属人化し、迅速な障害対応ができない。

エ：監視は運用設計として事前に用意すべきである。

総合解説：納入準備では開発成果物から運用・保守へ引き継ぐ対象を整理し、受入れ側が自立して運用できる状態を作る。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0082

導入・受入れ > 受入れテスト・納入・教育 | 難易度：基礎

新システム利用者には、日常利用者、管理者、月1回だけ使う承認者がいる。教育計画として最も適切なものはどれか。

ア．全員に同じ8時間の管理者向け技術研修を実施する。

イ．役割ごとの操作・判断・頻度を分析し、演習、マニュアル、短時間教材など内容と方法を分け、稼働時期に合わせて実施する。

ウ．マニュアルを配布すれば教育完了とし、理解度や操作練習は確認しない。

エ．稼働から半年後に初回教育を行う。

答え・解説

正答：イ

ア：不要・過剰な内容で学習効果が低い。

イ：利用者の役割・知識レベル・利用頻度に合わせることで必要能力を効率よく獲得できる。

ウ：資料配布と利用能力獲得は同じではない。

エ：稼働時に必要な能力が間に合わない。

総合解説：SAシラバスでは利用者の操作能力に応じた教育・訓練・支援の計画と実施が求められる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0083

導入・受入れ > 受入れテスト・納入・教育 | 難易度：標準

オペレータ向け障害復旧訓練を実施した。教育が有効だったか確認する方法として最も適切なものはどれか。

ア．出席者数だけで教育効果を判定する。

イ．研修資料のページ数が多ければ十分とする。

ウ．代表的な障害シナリオで手順を実行してもらい、正確性・所要時間・エスカレーション判断を評価して不足を再教育する。

エ．講師が説明できたことをもって受講者も理解したとみなす。

答え・解説

正答：ウ

ア：出席は理解・遂行能力を示さない。

イ：資料量は教育効果と直結しない。

ウ：実務で必要な行動を演習・評価することで能力獲得を確認できる。

エ：説明と受講者の習得は別である。

総合解説：教育訓練は実施した事実だけでなく、対象者が稼働後に必要な操作・判断を行えるかで有効性を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0084

導入・受入れ > 受入れテスト・納入・教育 | 難易度：応用

受入れテストで、業務影響の小さい表示崩れが2件残った。契約上は条件付き受入れが可能である。最も適切な対応はどれか。

ア．軽微と感じた担当者が口頭で無視し、記録を残さない。

イ．1件でも不具合があれば契約条件に関係なく必ず全納入を拒否する。

ウ．受入れ後は供給者の責任がなくなるので、修正期限を決めない。

エ．影響と回避策を評価し、修正期限・責任・再確認方法を記録して権限者が条件付き受入れの可否を判断する。

答え・解説

正答：エ

ア：将来の責任・修正状況を追跡できない。

イ：不具合の重大度や契約条件を無視した機械的判断である。

ウ：条件付き受入れでも未完事項は管理が必要である。

エ：契約に許容手段がある場合も、残余リスクと是正条件を明確にして正式判断する必要がある。

総合解説：受入れは単純な合否ではなく、合意済み基準に照らして未解決事項を評価し、必要なら条件・期限を契約的に明確化する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0085

導入・受入れ > 受入れテスト・納入・教育 | 難易度：標準

新システム稼働直後は問い合わせ増加と操作ミスが予想される。受入れ・教育後の支援として最も適切なものはどれか。

ア．一定期間のハイパーケア体制を設け、問い合わせ窓口、重大度別エスカレーション、FAQ更新、問題傾向の分析と恒久対策を行う。

イ．教育を実施済みなので稼働後の支援は不要とする。

ウ．全問い合わせを開発者個人へ直接送らせ、記録しない。

エ．問い合わせが多い場合は利用者の責任とし、システム改善へ反映しない。

答え・解説

正答：ア

ア：初期支援を計画化すると、利用者支援と初期不具合の早期収束を両立できる。

イ：実運用で初めて顕在化する問題もあり、支援が必要である。

ウ：窓口分散と無記録は優先順位付け・知識蓄積を妨げる。

エ：問い合わせ傾向はUIや教育・業務設計の改善材料でもある。

総合解説：SAシラバスは取得者への初期および継続的な教育訓練・支援を扱う。稼働初期の支援を運用引継ぎと一体で設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0086

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：基礎

24時間稼働の受注システムについて、平常時・保守時・障害時で担当者の行動が曖昧である。運用設計で最初に明確化すべき内容として最も適切なものはどれか。

ア．監視ツールの製品名だけを決め、担当範囲は障害発生時に調整する。

イ．運用モードごとの役割・責任、連絡経路、判断権限を定め、運用手順と対応付ける。

ウ．利用者向け画面の配色を先に確定し、運用体制は稼働後に検討する。

エ．開発者全員を常時待機させ、運用者の役割は設定しない。

答え・解説

正答：イ

ア：ツール選定だけでは責任境界や判断権限が不明なままである。

イ：運用方針・制約を踏まえて役割分担や通常・保守・緊急時などの運用モードを設計するのが基本である。

ウ：画面配色は運用体制の設計課題を解決しない。

エ：開発者の常時待機は持続可能性に乏しく、運用プロセスの責任設計にもならない。

総合解説：運用プロセス実施計画では、取得者・供給者・運用者・利用者等の役割分担と、通常運用、保守、訓練、緊急事態などの運用モードを考慮する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0087

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：基礎

運用テスト計画の終了基準として最も適切なものはどれか。

- ア．主要な運用シナリオが実施済みで、重大な未解決障害がなく、定めた運用評価基準を満たしていること。
- イ．テスト実施日数が計画値に達したことだけ。
- ウ．運用担当者が一度でも本番画面へログインできたこと。
- エ．開発チームが「問題ない」と口頭で判断したこと。

答え・解説

正答：ア

ア：終了基準はテスト結果を客観的に評価できる条件で定める必要がある。

イ：日数だけでは品質や運用可能性を保証できない。

ウ：ログイン成功だけでは運用全体の妥当性を確認できない。

エ：客観的な基準と記録がなく、再現性・説明可能性に欠ける。

総合解説：シラバスは運用テスト計画を作成し、運用テスト終了基準を設けることを求めている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0088

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：基礎

本番では夜間バッチが大量データを処理するが、運用テスト環境には少量のデータしかない。最も適切な対応はどれか。

- ア．少量データで手順だけ確認できれば、本番規模の確認は不要とする。
- イ．本番の処理量・構成・運用時間帯を踏まえ、重要な運用条件を再現できるデータ量と環境を用意する。
- ウ．本番稼働後の最初の夜間バッチを運用テストとして扱う。
- エ．性能問題は開発テストの範囲なので、運用テストでは一切確認しない。

答え・解説

正答：イ

ア：本番規模でのみ顕在化する問題を見逃すおそれがある。

イ：運用テスト環境は、重要な実運用条件を踏まえて適切性を判断する必要がある。

ウ：本番で初めて検証すると業務影響が直接発生する。

エ：運用テストでも性能や手順、資源利用など実運用上の成立性を確認する。

総合解説：運用テストの準備では、実運用環境や利用者特性を踏まえて環境の適切性を判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0089

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：基礎

障害復旧手順書を改善する観点として最も適切なものはどれか。

ア．熟練者だけが理解できる略語を増やして文章を短くする。

イ．コマンド列だけを記載し、実行結果の確認方法は省略する。

ウ．前提条件、実施手順、確認方法、異常時の判断・エスカレーション条件を明記し、第三者が再現できる状態にする。

エ．障害種別に関係なく常に同じ復旧手順を使用する。

答え・解説

正答：ウ

ア：属人化を強め、訓練や引継ぎを困難にする。

イ：確認方法がないと誤操作や不完全復旧を検出しにくい。

ウ：運用手順は再現可能で、判断条件と結果確認まで含むことが重要である。

エ：障害原因・影響に応じて適切な手順や判断が異なる。

総合解説：運用方式設計では運用手順を含め、必要な情報を運用者に提供できる形にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0090

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：標準

APIの応答時間悪化を監視しているが、閾値超過時に誰が何をするか決まっておらず、アラートが放置されている。改善として最も適切なものはどれか。

ア．アラート件数を減らすため、すべての閾値を十分大きくする。

イ．通知先を全社員にして、誰かが対応することを期待する。

ウ．監視を廃止し、利用者から苦情が来たときだけ調査する。

エ．アラートの重要度、一次切分け、担当者、エスカレーション、復旧確認を運用手順として定義する。

答え・解説

正答：エ

ア：閾値を緩めるだけでは異常検知の実効性が下がる。

イ：責任者不明の一斉通知は対応漏れや重複対応につながる。

ウ：利用者申告だけでは検知が遅れ、影響が拡大する可能性がある。

エ：監視は検知後の判断・対応プロセスと結び付けて初めて有効に機能する。

総合解説：運用方式では運用体制、要員、手順、運用管理ツールを整合させる必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0091

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：標準

バックアップジョブは毎日成功しているが、過去2年間リストアを試していない。運用テストとして最も重要な追加確認はどれか。

- ア．代表的な障害シナリオで実際に復元し、復旧時間、データ整合性、手順の実行可能性を確認する。
- イ．バックアップログに成功と表示されることだけを毎日確認する。
- ウ．バックアップ媒体の容量が増えていることだけを確認する。
- エ．復旧は障害時に初めて行い、その結果をもって手順を評価する。

答え・解説

正答：ア

ア：バックアップ取得成功と復元可能性は別であり、復旧手順を実証する必要がある。

イ：ログだけでは破損や依存関係不足などを検知できない。

ウ：容量増加は復元可能性や整合性を示さない。

エ：本番障害時の初回実施では復旧失敗のリスクが大きい。

総合解説：シラバスは運用テスト準備でバックアップ・リカバリ運用の適切性判断を求めている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0092

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：標準

夜間売上集計バッチが途中で停止した際、最初から再実行すると売上が二重計上される。運用性を高める設計として最も適切なものはどれか。

- ア．障害時はDBを必ず前日のバックアップへ戻す。
- イ．処理単位の完了状態を管理し、再実行しても重複更新しない仕組みと再開手順を設計する。
- ウ．二重計上は後日手作業で修正する運用に固定する。
- エ．バッチ処理のログを削除してから再実行する。

答え・解説

正答：イ

ア：全データを前日に戻すと、正常に処理された他業務データまで失う可能性がある。

イ：チェックポイントや幂等性を考慮すると、障害時の再開と復旧の安全性が高まる。

ウ：恒常的な手修正は誤りや復旧時間増大を招く。

エ：ログ削除は状態を直さず、原因調査の証跡も失う。

総合解説：運用方式は異常時の手順まで含めて設計し、実行可能性を運用テストで確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0093

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：標準

運用テストで、通常処理は合格したが障害時の切替えが終了基準を満たさなかった。稼働日が迫っている。最も適切な対応はどれか。

- ア．通常処理が合格しているので、障害時試験は結果に関係なく合格扱いにする。
- イ．開発者だけで稼働を決め、利用部門には稼働後に報告する。
- ウ．業務影響とリスクを評価し、利用部門を含む関係者と是正・延期・暫定措置を調整して判断する。
- エ．終了基準を事後的に緩め、再評価を行わない。

答え・解説

正答：ウ

ア：障害時運用は可用性に直結し、無視できない。
イ：利用部門の業務継続リスクを含むため単独判断は不適切である。
ウ：基準未達を隠さず、影響評価と関係者調整に基づいて対応を決める必要がある。
エ：基準の恣意的変更は品質判断の客観性を失わせる。
総合解説：シラバスは運用評価基準に満たない項目が見つかった場合、利用部門と調整して対応を決定することを求める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0094

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：標準

新システムでは障害時に5分以内で一次切分けを開始する必要がある。運用者訓練として最も効果的なものはどれか。

- ア．マニュアルをメールで配布し、既読確認だけで訓練完了とする。
- イ．システム概要の講義だけを実施し、障害対応操作は扱わない。
- ウ．本番障害が起きるまで訓練せず、実地で習得する。
- エ．実際の監視通知と手順書を使った障害シナリオ演習を行い、開始時間・判断・連絡を評価する。

答え・解説

正答：エ

ア：既読だけでは手順を実行できるか確認できない。
イ：知識講義だけでは時間制約のある実務対応を検証できない。
ウ：本番での初回実施は業務リスクが高い。
エ：要求される行動をシナリオで実践し、時間・判断・連絡を確認するのが適切である。
総合解説：システム運用の訓練では訓練計画、資料、実施支援が求められる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0095

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：標準

運用テストで、利用者が「処理中」と「受付完了」を取り違える操作ミスが多発した。最も適切な対応はどれか。

- ア．原因を分析し、必要に応じ画面表示と利用者用文書を修正して再確認する。
- イ．利用者の習熟不足として記録するだけで、システムや文書は変更しない。
- ウ．誤操作を防ぐため利用者向けマニュアルを削除する。
- エ．テスト結果を非公開にし、稼働後の問い合わせ件数で判断する。

答え・解説

正答：ア

ア：運用テスト結果は利用者用文書や使用性の改善へ反映すべきである。

イ：誤りが体系的に発生しているなら表示・文書・教育の改善余地を検討する必要がある。

ウ：文書削除は理解をさらに困難にする。

エ：問題を稼働後へ先送りするのは適切でない。

総合解説：シラバスは運用テスト結果に基づき利用者用文書を見直し、更新することを明示している。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0096

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：応用

通常時はDB更新を自動化しているが、災害時の縮退運用では手入力台帳を使う。復旧後に台帳内容をDBへ反映する設計がない。最も重要な改善はどれか。

- ア．縮退中の取引はすべて破棄する前提にする。
- イ．縮退運用で発生した取引を識別・照合し、復旧後に重複や欠落なく反映する手順と検証基準を設ける。
- ウ．復旧後に担当者の記憶で必要な取引だけを再入力する。
- エ．災害時はログを保存しないことで作業量を減らす。

答え・解説

正答：イ

ア：業務継続の目的に反し、顧客取引を失う。

イ：通常・緊急・復旧の各運用モードをつなぐデータ整合性の設計が必要である。

ウ：記憶依存では欠落・重複を防げない。

エ：ログは照合や監査の根拠になるため保存が重要である。

総合解説：運用モードを設計する際は、切替えだけでなく元の状態へ戻す際の業務・データ整合性まで考慮する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0097

運用・移行 > 運用設計・運用テスト | 難易度：応用

運用テストでは機能は正常だったが、ピーク時の監視アラートが大量発生し、運用者が重大障害を見分けられないことが判明した。最も適切な判断はどれか。

ア．アプリケーション機能が正常なので、そのままリリースする。

イ．アラートをすべて無効化してからリリースする。

ウ．監視設計と優先度付けを是正し、重大事象を識別できることを再確認してからリリース判断を行う。

エ．運用者を増員すればよいので、監視設計は変更しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：重大アラートを識別できない状態は障害検知・対応リスクが高い。

イ：監視無効化は異常検知能力を失う。

ウ：運用可能性は機能正常だけでなく、監視・対応が実行できるかまで含めて評価する。

エ：人員追加だけで根本的なシグナル対ノイズの問題を解決しない。

総合解説：各リリースは運用テストで指定基準を満たしたことを確認して実運用へリリースする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0098

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：基礎

システム移行計画に含める内容として最も適切なものはどれか。

ア．新システムの機能一覧だけを記載する。

イ．移行当日の担当者名だけを記載する。

ウ．旧システムの廃棄日だけを定める。

エ．移行対象、手順、要員・資源、日程、リハーサル、判定基準、障害時の対応を整理する。

答え・解説

正答：エ

ア：機能一覧だけでは移行作業を実行できない。

イ：担当者名だけでは手順や判断条件が不足する。

ウ：廃棄日だけでは安全な切替えを設計できない。

エ：移行は業務継続を担保しながら複数の作業を調整するため、対象・手順・資源・検証・異常時対応まで計画する。

総合解説：シラバスは移行環境、ツール、データ、文書、並行運用、資源、リハーサル、問題対策、実施、検証などを移行計画に含めるとしている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0099

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：基礎

移行リハーサルの主な目的として最も適切なものはどれか。

- ア．手順・所要時間・依存関係・役割分担を実行して確認し、本番前に問題と改善点を明らかにする。
- イ．移行後のシステム性能を長期運用実績だけで評価する。
- ウ．本番切替えの代わりにリハーサル環境を恒久運用する。
- エ．旧システムの監査記録を削除する。

答え・解説

正答：ア

ア：リハーサルは移行手順の実行可能性と時間・体制を事前検証するために行う。

イ：長期運用実績はリハーサルだけでは得られない。

ウ：リハーサル環境を本番代替にすることが目的ではない。

エ：監査記録削除はリハーサル目的と無関係で不適切である。

総合解説：移行リハーサルは本番での不確実性を下げ、問題への事前対策を可能にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0100

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：基礎

旧・新システムの並行運用を採用する主な利点として最も適切なものはどれか。

- ア．二重作業やデータ同期の管理が不要になる。
- イ．一定期間、同じ業務結果を比較でき、新システム異常時に旧運用へ依存できる余地を持てる。
- ウ．旧システムを即時廃止できる。
- エ．移行結果の照合を行わなくてもよくなる。

答え・解説

正答：イ

ア：むしろ二重作業や整合性管理が必要になることが多い。

イ：並行運用は安全性を高める一方、二重作業や同期・照合の負荷が増える。

ウ：旧システムを一定期間残す方式である。

エ：新旧結果の比較・照合は重要な目的の一つである。

総合解説：並行運用は移行リスク低減に有効だが、コスト・手順・データ整合性を含めて計画する必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0101

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：基礎

本番切替え開始前のGo/No-Go判定基準として最も適切なものはどれか。

ア．開始時刻になったことだけでGoとする。

イ．担当者全員が楽観的であればGoとする。

ウ．必須事前作業、バックアップ、移行資源、重大障害、関係者準備などを客観的なチェック項目で確認する。

エ．前回リハーサルが成功していれば当日の状態は確認しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：時刻到達だけでは前提条件を保証しない。

イ：主観的判断だけでは説明可能性が低い。

ウ：切替え判断は当日の前提条件とリスクを客観的に確認できる基準で行う。

エ：環境やデータ、要員の状態は当日変化し得る。

総合解説：移行時の問題を予測し、事前対策と検証・妥当性確認を行うため、判定基準の明確化が有効である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0102

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：標準

顧客データ100万件を新DBへ移行する。件数一致だけでは不十分な理由として最も適切なものはどれか。

ア．件数が同じならデータ内容も必ず同一になるため。

イ．データ移行では件数を確認してはいけないため。

ウ．新DBでは参照整合性が存在しないため。

エ．件数が同じでも、項目変換誤り、重複・欠落の相殺、参照整合性違反が存在し得るためである。

答え・解説

正答：エ

ア：件数一致は必要な確認の一つだが十分条件ではない。

イ：件数確認を禁止する理由はない。

ウ：DB設計によって参照関係は存在し得る。

エ：件数に加え、重要項目、合計値、キー対応、参照関係など複数の観点で検証する必要がある。

総合解説：移行結果の検証・妥当性確認では、業務上意味のある整合性まで確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0103

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：標準

移行前夜に旧システムのマスターデータ更新が続くと、抽出済み移行データとの差分が生じる。最も適切な対策はどれか。

- ア．更新凍結または差分取得のルールを定め、基準時点と最終同期・照合手順を明確にする。
- イ．差分は無視し、利用者に後で再登録してもらう。
- ウ．抽出時刻を記録せず、移行後に推測する。
- エ．更新を続けたまま全件抽出を何度も繰り返す。

答え・解説

正答：ア

ア：データの基準時点を示し、凍結または差分管理で整合性を制御する。
イ：業務データの欠落を意図的に発生させる。
ウ：基準時点が不明だと照合できない。
エ：無制御な再抽出では一貫したスナップショットを保証できない。
総合解説：移行用データの準備と新旧運用手順の切替えでは、更新タイミングと差分の扱いを計画する必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0104

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：標準

切替え後30分で決済連携に重大障害が発生した。ロールバック判断を迅速にするため事前に最も重要なものはどれか。

- ア．障害発生後に初めて旧環境の起動方法を調べる。
- イ．許容できる障害・時間・データ状態を踏まえ、ロールバック条件、判断者、戻し手順を決めておく。
- ウ．判断は現場担当者の直感だけに任せる。
- エ．ロールバックは失敗の印象を与えるので計画しない。

答え・解説

正答：イ

ア：復旧方法の調査を障害後に始めると復旧が遅れる。
イ：事前に条件・権限・手順を定義すると、時間制約下でも一貫した判断ができる。
ウ：重要判断を個人の直感だけに依存させるのは危険である。
エ：ロールバックは重大リスクに備える合理的な選択肢である。
総合解説：移行時に発生する問題を予測し、事前に対策を用意することが求められる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0105

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：標準

移行のため8時間停止が必要だが、営業部門は月末の停止を受け入れられない。アーキテクトの対応として最も適切なものはどれか。

ア．技術チームの都合を優先して月末停止を確定する。

イ．営業部門に停止理由を説明せず、当日通知する。

ウ．業務制約と技術的選択肢を整理し、停止時間短縮、時期変更、段階移行などを比較して関係者と合意する。

エ．停止が難しいので移行計画そのものを文書化しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：業務影響を無視した一方的な判断は不適切である。

イ：事前調整を欠くと業務混乱が拡大する。

ウ：移行は業務継続性に関わるため、制約を踏まえ代替案を比較し合意形成する。

エ：難しい状況ほど計画・リスク・責任を文書化する必要がある。

総合解説：シラバスは移行作業に伴う業務への影響を発見し、対策を検討し、異なる意見を調整する能力を求める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0106

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：標準

新システム切替えから1か月後に実施する移行評価レビューで最も重視すべき内容はどれか。

ア．移行当日の担当者の感想だけを記録する。

イ．計画書どおり実施したかだけを確認し、稼働後の効果は扱わない。

ウ．問題が発生していなければレビュー自体を省略する。

エ．移行による業務・システムへの影響と効果、残課題を実績データと利用者意見で評価し、改善へつなげる。

答え・解説

正答：エ

ア：主観だけでは全体評価にならない。

イ：稼働後の影響・効果が重要な評価対象である。

ウ：問題が表面化していなくても効果や改善点を確認する価値がある。

エ：運用後レビューは新環境への変更の影響・効果を評価し、関係者へ報告する。

総合解説：シラバス17-2は新環境への変更の影響又は効果を評価するため運用後レビューを実施するとしている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0107

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：標準

新システム切替え直後、旧システムを一定期間参照可能にする設計の主な狙いとして最も適切なものはどれか。

- ア：移行漏れの確認や過去データ参照など、移行直後に必要な支援を安全に提供するため。
- イ：新システムを使わず旧システムへ恒久的に戻るため。
- ウ：アクセス制御を不要にするため。
- エ：旧データの保存期限を無期限にするため。

答え・解説

正答：ア

- ア：旧運用環境の支援は移行後の確認や参照に有用だが、アクセス・期間・責任を管理する必要がある。
 - イ：新システム移行の目的と矛盾する。
 - ウ：旧環境でもデータ保護や監査要求に従う必要がある。
 - エ：保存期間は法令・契約・業務要求に基づいて定めるべきである。
- 総合解説：シラバスは移行後の旧運用環境の支援と旧環境関連データの保持・安全性確保を挙げている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0108

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：応用

切替え可能時間は6時間である。リハーサルではデータ変換4時間、検証2時間、アプリ切替え1時間だった。各作業は順次実施が必要である。最も適切な対応はどれか。

- ア：6時間の枠内に収まるとみなし、そのまま本番を実施する。
- イ：現行手順では7時間必要なので、作業短縮・事前実施・停止時間拡大などの代替案を検討し、再リハーサルする。
- ウ：検証2時間を省略して5時間にする。
- エ：アプリ切替えを検証より前に実施すれば必ず6時間以内になる。

答え・解説

正答：イ

- ア：単純合計で7時間であり根拠がない。
 - イ：時間制約を満たさないことが実績から明らかなので、計画を変更し検証する必要がある。
 - ウ：検証省略は移行品質を損なう。
 - エ：順次実施が必要という前提では順序入替えだけで総時間は減らない。
- 総合解説：移行リハーサルの実績は、本番時間枠の成立性を確認し計画改善へ反映する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0109

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：応用

新旧システムを2週間並行運用する。顧客住所を両方で更新可能にすると不整合が頻発した。最も適切な改善はどれか。

- ア．両システムを独立に更新し、差異は無視する。
- イ．同期処理を停止し、移行終了後に担当者が目視で統合する。
- ウ．更新の正本を一方に定め、同期方向・タイミング・競合処理と照合方法を明確にする。
- エ．住所更新機能を両方から削除し、顧客更新を禁止する。

答え・解説

正答：ウ

- ア：不整合を許容すると業務結果が一致しない。
- イ：大量差分の手作業統合は誤りや漏れが発生しやすい。
- ウ：並行運用ではデータの所有権と同期ルールを明確にしないと整合性が崩れる。
- エ：業務要件として更新が必要なら機能停止は適切な解決ではない。
- 総合解説：並行運用の計画では新旧業務・システム間のデータ更新責任と整合性を管理する必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0110

運用・移行 > 移行計画・リハーサル・切替え | 難易度：応用

新システム切替え後、一部処理だけが失敗した。旧システムへ戻すと切替え後に新システムで受け付けた注文50件を失う可能性がある。最初に行うべき判断として最も適切なものはどれか。

- ア．直ちに旧システムへ戻し、50件の扱いは後で考える。
- イ．新システムを継続し、失敗処理の影響は調査しない。
- ウ．注文50件を削除してからロールバックする。
- エ．障害範囲と新規注文の保存状態を把握し、ロールバック時のデータ保全方法を含めて影響を評価する。

答え・解説

正答：エ

- ア：データ損失を未評価のまま実行するのは危険である。
- イ：障害範囲を把握せず継続するのもリスクがある。
- ウ：正当な業務データを意図的に削除するのは不適切である。
- エ：切替え後のデータを失わずに安全な復旧策を選ぶため、障害範囲とデータ状態の把握が先である。
- 総合解説：システム移行時に発生した問題は、影響を判断して解決する能力が求められる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0111

運用・移行＞バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：基礎

RPO（目標復旧地点）とRTO（目標復旧時間）の説明として最も適切なものはどれか。

- ア．RPOは許容できるデータ損失の時間的な遡り幅、RTOはサービスを復旧させるまでの目標時間を表す。
- イ．RPOは復旧時間、RTOは保存期間を表す。
- ウ．RPOとRTOはどちらも稼働率を表す同義語である。
- エ．RPOは障害件数、RTOは平均応答時間を表す。

答え・解説

正答：ア

ア：RPOとRTOはそれぞれデータ復旧地点と復旧時間の目標を表す。

イ：定義が逆であり、保存期間とも異なる。

ウ：稼働率とは別の指標である。

エ：障害件数や応答時間を表す指標ではない。

総合解説：非機能要求グレードでは業務継続性のメトリクスとしてRPO、RTOを扱っている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0112

運用・移行＞バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：基礎

最大でも1時間分の更新データ損失しか許容できない業務で、バックアップが日次1回だけである。最も適切な評価はどれか。

- ア．日次バックアップなら必ずRPO 1時間を満たす。
- イ．現行方式ではRPO 1時間を満たせない可能性が高く、より短い間隔の取得やログ転送等を検討する。
- ウ．RPOは復旧時間の指標なのでバックアップ間隔と無関係である。
- エ．バックアップ頻度を下げるほどRPOを満たしやすい。

答え・解説

正答：イ

ア：最大24時間近いデータ損失が生じ得る。

イ：RPOが短いほど、更新データをより細かい間隔で保護する必要がある。

ウ：RPOはデータ損失量に関係する。

エ：頻度を下げると失われ得る更新量は増える。

総合解説：バックアップ取得間隔はRPO要件に応じて決める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0113

運用・移行 > バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：基礎

災害時に全システムを同時復旧できない。復旧優先順位を決める根拠として最も適切なものはどれか。

ア．サーバ台数が多いシステムから順に復旧する。

イ．開発費が高かったシステムだけを最優先する。

ウ．業務停止による影響、許容停止時間、依存関係などを分析し、重要業務から復旧できるようにする。

エ．担当者の希望順に復旧する。

答え・解説

正答：ウ

ア：台数は業務重要度を直接表さない。

イ：投資額だけでは停止影響や依存関係を評価できない。

ウ：業務影響分析を基に重要度と時間制約を判断するのが合理的である。

エ：主観的な希望だけでは一貫した優先順位にならない。

総合解説：コンティンジェンシープランではBIA等の結果に応じて復旧戦略を選ぶ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0114

運用・移行 > バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：標準

DBとファイルストレージを別々にバックアップしている。両者の更新に関連性がある場合、復旧時に最も重要な観点はどれか。

ア．DBとファイルの容量が同じであることを確認する。

イ．バックアップのファイル名を同じにする。

ウ．どちらか一方だけ最新なら整合性は自動的に保証される。

エ．同一の論理時点として整合する復旧セットを作れるよう、取得順序やスナップショット、ログの扱いを設計する。

答え・解説

正答：エ

ア：容量一致は論理整合性を保証しない。

イ：名称一致も内容の整合性とは無関係である。

ウ：一方だけ新しいと参照関係が崩れる場合がある。

エ：複数資源間の整合性が必要な場合、時点や更新関係を揃えて復旧できる設計が必要である。

総合解説：バックアップ・リカバリ運用はデータ復旧範囲と整合性まで含めて設計・テストする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0115

運用・移行＞バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：標準

DRサイトへのデータ複製は正常だが、DNS切替えと外部認証サービスへの接続を一度も試していない。最も適切な対応はどれか。

- ア．依存サービスを含む切替え手順を定期的に演習し、実際にサービス提供まで到達できることを確認する。
- イ．データ複製が成功しているため、DRテストは不要とする。
- ウ．DNSと認証は外部要素なのでBCP対象外とする。
- エ．本番災害時に初めて切替え手順を作成する。

答え・解説

正答：ア

- ア：復旧はデータ存在だけでなく、依存関係を含むサービス成立性で確認する必要がある。
 - イ：複製成功はサービス利用可能性の十分条件ではない。
 - ウ：外部依存も業務継続に必要な計画対象である。
 - エ：災害時に初めて設計すると復旧遅延のリスクが高い。
- 総合解説：復旧戦略はシステムの依存関係と運用要件を踏まえ、テスト・演習で確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0116

運用・移行＞バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：標準

本番サーバと同一管理者資格情報でバックアップ領域も削除できる。ランサムウェア対策として最も適切な改善はどれか。

- ア．本番とバックアップの管理者パスワードを共有し続ける。
- イ．バックアップを本番から分離し、削除・改ざん権限を制限した別管理経路やオフライン／変更困難なコピーを確保する。
- ウ．バックアップを同じサーバの別フォルダにだけ保存する。
- エ．復旧テストをやめてバックアップへのアクセス回数を減らす。

答え・解説

正答：イ

- ア：共通資格情報は同時侵害のリスクを高める。
 - イ：障害や侵害が本番とバックアップへ同時波及しないよう分離・権限制御するのが重要である。
 - ウ：同一サーバだけでは障害・侵害の共通原因を避けにくい。
 - エ：復旧テストはむしろ必要である。
- 総合解説：バックアップ戦略は障害・侵害時にも利用可能な復旧手段を確保する観点で設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0117

運用・移行＞バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：標準

RTOが2時間のシステムで、復旧訓練の実績は平均3時間20分だった。最も適切な対応はどれか。

ア．RTOは目安なので実績が長くても問題ないとする。

イ．RTOを実績に合わせて3時間20分へ事後変更し、業務部門には伝えない。

ウ．手順・自動化・要員・代替構成を見直して短縮し、再訓練で2時間以内の成立性を確認する。

エ．訓練結果を記録しないことで未達を解消する。

答え・解説

正答：ウ

ア：合意された復旧目標を無視している。

イ：要求変更には業務側との合意が必要である。

ウ：要求未達なので原因を分析し、復旧戦略・手順を改善して再検証する。

エ：記録を消しても復旧能力は改善しない。

総合解説：RTOは業務継続要求として復旧設計・訓練の評価基準になる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0118

運用・移行＞バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：標準

大規模障害時でも「注文受付」だけは継続し、在庫引当や配送指示は復旧後に処理してよい。最も適切な設計はどれか。

ア．通常時と同じ全機能を必ず同時復旧するまでサービスを停止する。

イ．注文を紙に書くだけで、システム復旧後の登録方法は決めない。

ウ．障害時に受け付けた注文は復旧後すべて破棄する。

エ．重要業務を注文受付に絞った縮退モードを設け、後続処理へ安全に引き継げるデータ保持と再処理手順を用意する。

答え・解説

正答：エ

ア：全機能同時復旧が必要とは限らずRTOを悪化させる可能性がある。

イ：後処理が未設計では欠落・重複が生じる。

ウ：業務継続の目的に反する。

エ：業務継続要件に応じて重要機能を限定し、復旧後の整合性まで設計する。

総合解説：継続性では対象業務範囲と目標復旧水準に応じた方式を選ぶ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0119

運用・移行 > バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：応用

販売システムは認証基盤と商品マスタDBに依存し、商品マスタDBは共有ストレージに依存する。販売システムのRTOだけを短く設定しても達成できない可能性がある。最も適切な改善はどれか。

- ア．依存サービスごとの復旧目標と復旧順序を整合させ、エンドツーエンドでRTOを検証する。
- イ．販売システムのサーバだけを最優先で起動する。
- ウ．依存サービスのRTOはすべて未定義のままにする。
- エ．販売システムの監視を停止して復旧完了と判定する。

答え・解説

正答：ア

ア：利用サービスの復旧目標は依存基盤の復旧能力と整合していなければ達成できない。
イ：依存先が使えなければ販売機能は成立しない。
ウ：未定義では復旧計画を整合させられない。
エ：監視停止はサービス復旧を意味しない。
総合解説：復旧戦略では依存関係を含むシステム全体の成立性を考慮する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0120

運用・移行 > バックアップ・リカバリ・業務継続 | 難易度：応用

同一拠点の本番ストレージとバックアップ装置を利用している。装置故障には対応できるが、拠点全体が利用不能になる災害にも対応する必要がある。最も適切な改善はどれか。

- ア．同一拠点のバックアップ装置をもう1台追加するだけ。
- イ．BIAとRPO/RTOに基づき、地理的に分離したバックアップや代替サイトを組み合わせ、拠点障害を共通原因から分離する。
- ウ．本番ストレージの容量を2倍にする。
- エ．バックアップの保持期間を短くして装置負荷を下げる。

答え・解説

正答：イ

ア：同一拠点の追加装置は拠点災害への分離にならない。
イ：拠点全体の喪失を想定するなら、同じ共通障害に巻き込まれない場所・方式を選ぶ必要がある。
ウ：容量増加は災害時の利用可能性を高めない。
エ：保持期間短縮は拠点災害対策ではない。
総合解説：復旧方式は想定する障害影響と許容停止時間に応じて選択する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0121

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：基礎

システム運用の評価項目としてIPAシラバスに沿うものはどれか。

ア．開発者の出勤時刻だけを評価する。

イ．ソースコードの行数だけで運用品質を評価する。

ウ．応答時間、資源利用状況、障害件数、回復時間、稼働率などを実績として評価する。

エ．広告デザインの好みだけを評価する。

答え・解説

正答：ウ

ア：運用品質との直接的な関連が乏しい。

イ：コード行数だけでは運用成果を説明できない。

ウ：システム運用評価では性能、障害、回復、稼働率、安全性、作業負荷等の運用実績を評価する。

エ：広告デザインは運用評価の中心項目ではない。

総合解説：シラバス18-1は要件実現度、応答・処理時間、資源利用、障害・回復、稼働率、安全性・セキュリティ等を評価項目として列挙している。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0122

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：基礎

「画面応答は目標内だが、利用者が入力手順を分かりにくいと感じ、業務処理時間が増えた」という状況で必要な評価はどれか。

ア．応答時間が目標内なので評価を終了する。

イ．利用者の意見はシステム評価と無関係なので除外する。

ウ．業務処理時間は測定せず、サーバCPU利用率だけを見る。

エ．システム性能だけでなく、使用性や業務運用面の実現度を評価し、業務改善要求を検討する。

答え・解説

正答：エ

ア：技術指標だけでは業務成果を判断できない。

イ：利用者の使いやすさは評価対象である。

ウ：CPUだけでは業務処理時間増加の原因や効果を評価できない。

エ：シラバスはシステム運用と業務運用の両面で使用性・利用目的の実現度を評価する。

総合解説：運用後は技術的性能と業務上の使用性・効果を分けて評価し、必要に応じ改善要求につなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0123

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：基礎

障害件数は前年と同じだが、平均回復時間が30分から90分へ悪化した。評価として最も適切なものはどれか。

ア：障害件数だけでなく回復時間の悪化を問題として分析し、復旧手順・体制・監視などの改善ニーズを検討する。

イ：件数が同じなので運用品質は変化していないと判断する。

ウ：回復時間は運用評価の対象外とする。

エ：障害を記録しないことで平均回復時間を改善する。

答え・解説

正答：ア

ア：回復時間も重要な運用評価指標であり、悪化原因を分析する必要がある。

イ：件数だけでは影響時間を評価できない。

ウ：シラバスは回復時間を評価項目に挙げる。

エ：記録を減らしても実際の復旧能力は改善しない。

総合解説：障害頻度と回復時間は別の側面を示すため、複数指標で評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0124

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：標準

平均CPU利用率は30%だが、月末10分間だけCPUが100%となり処理遅延が発生する。最も適切な評価はどれか。

ア：平均30%なので容量問題はないと判断する。

イ：平均値だけでなくピーク時間帯の資源利用と処理時間を分析し、容量・処理方式の改善を検討する。

ウ：ピーク時の測定値を平均から除外する。

エ：CPU台数を必ず2倍にすれば分析は不要とする。

答え・解説

正答：イ

ア：平均値は短時間のボトルネックを隠す。

イ：ピーク特性を含めて応答・処理時間と資源利用を評価する必要がある。

ウ：データ除外は問題を隠す。

エ：増強は選択肢の一つだが、原因分析なしで最適とは限らない。

総合解説：システム運用評価では応答時間、処理時間、資源利用状況を評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0125

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：標準

新システム導入後、障害は減ったが、運用者の夜間手作業が月20時間から60時間へ増えた。最も適切な評価はどれか。

- ア．障害が減ったので運用改善は成功とだけ判断する。
- イ．夜間作業は人の問題なのでシステム評価から除外する。
- ウ．障害件数だけでなく運用者の作業負荷増大を運用効果の問題として評価し、自動化や手順改善を検討する。
- エ．作業時間を記録しないようにする。

答え・解説

正答：ウ

ア：一つの指標改善だけで全体効果を断定できない。

イ：シラバスは運用者の作業負荷を明示する。

ウ：運用者の作業負荷もシステム運用評価の対象である。

エ：記録をやめても負荷そのものは減らない。

総合解説：運用評価は性能・障害だけでなく運用作業負荷や使用性まで含む。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0126

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：標準

不正ログイン試行が急増したが、侵害は確認されていない。運用評価として最も適切なものはどれか。

- ア．侵害がないので記録を削除して何もしない。
- イ．ログイン試行回数は性能指標でないため評価対象外とする。
- ウ．すべての利用者アカウントを永久停止する。
- エ．検知件数・発生源・認証方式・遮断状況を分析し、監視やアクセス制御の改善要求が必要か判断する。

答え・解説

正答：エ

ア：侵害前の兆候を無視するのはリスク管理として不適切である。

イ：セキュリティはシステム運用評価対象である。

ウ：一律永久停止は業務要件を無視した過剰対応である。

エ：安全性・セキュリティも運用評価項目であり、兆候から改善ニーズを収集する。

総合解説：シラバス18-1は安全性とセキュリティを運用評価対象に含める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0127

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：標準

システム切替え後、入力エラー率は低下したが、承認待ち時間が2倍になった。最も適切な評価方法はどれか。

- ア．新旧の業務フローを比較し、承認待ち増加がシステム・権限・運用手順のどこから生じたか分析する。
- イ．入力エラー率が改善したので他の業務指標は見ない。
- ウ．承認待ちは利用者の問題としてシステムと切り離す。
- エ．承認処理の測定を停止する。

答え・解説

正答：ア

ア：業務運用評価では移行後の業務全体への影響と改善要求を検討する。

イ：一指標の改善だけで業務効果全体を評価できない。

ウ：権限やUI、ワークフロー設計が影響している可能性がある。

エ：測定停止は原因分析を妨げる。

総合解説：シラバス19-1は業務運用移行時の影響や使いやすさ等を評価対象とする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0128

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：標準

ヘルプデスクへの操作問い合わせが稼働3か月後も高止まりしている。最も適切な対応はどれか。

- ア．利用者の能力不足と決め付けて調査しない。
- イ．問い合わせ内容を分類し、UI、マニュアル、FAQ、教育内容のどこに改善余地があるか評価する。
- ウ．問い合わせ窓口を閉鎖して件数をゼロにする。
- エ．問い合わせ件数だけを減らすため同じ回答文を自動返信する。

答え・解説

正答：イ

ア：原因分析せず利用者だけに帰責するのは適切でない。

イ：利用者から見た支援・教育訓練の受けやすさは業務運用評価の対象である。

ウ：窓口閉鎖は支援品質を悪化させる。

エ：件数の表面低減より根本原因の改善が必要である。

総合解説：業務運用評価では支援・教育訓練の受けやすさも評価し、改善要求につなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0129

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：応用

自動化により平均処理時間は40%短縮したが、例外処理の誤りが増え、再処理工数が月100時間増加した。最も適切な評価はどれか。

ア：処理時間だけ改善したので成功と判定する。

イ：再処理工数だけを見てシステムを即時廃止する。

ウ：処理時間短縮と品質・再処理工数を同じ業務目的に照らして評価し、例外処理の改善を含む総合効果を判断する。

エ：異なる指標は比較できないので評価をやめる。

答え・解説

正答：ウ

ア：品質悪化を無視している。

イ：一指標だけで廃止を決めるのも過剰である。

ウ：複数指標を業務目標に結び付け、便益と副作用を総合評価する必要がある。

エ：単位が異なっても業務目標・コスト・品質への影響として統合的に評価できる。

総合解説：システム運用・業務運用の評価は要求達成状況と主要改善ニーズを分析することが目的である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0130

評価・保守・改善 > システム運用・業務運用評価 | 難易度：応用

稼働率99.99%を達成しているが、重要な締め処理の時間帯に限って毎月短時間の停止が起き、業務締切に遅延が出ている。最も適切な評価はどれか。

ア：99.99%を達成しているので問題なしとする。

イ：締め処理の遅延は稼働率に含まれないため記録しない。

ウ：年間停止時間が少ないほど業務影響は必ず小さいとみなす。

エ：全体稼働率だけでなく重要業務時間帯の可用性と利用目的の達成状況を評価し、改善要求を設定する。

答え・解説

正答：エ

ア：年間平均だけでは重要時間帯への偏りを隠す。

イ：業務遅延も評価すべき影響である。

ウ：停止のタイミングにより同じ時間でも影響は異なる。

エ：利用目的と業務時間帯に対する実現度を評価する必要がある。

総合解説：運用評価では要件の実現度と特定の利用目的の実現度を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0131

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：基礎

新システムの業務効果を評価する際、導入前の処理時間や誤り率を記録しておく主な理由はどれか。

- ア．導入後実績と比較し、変化量を定量的に評価できるようにするため。
- イ．導入前データを多く集めるほどシステム性能が自動的に向上するため。
- ウ．新システムの要件定義を不要にするため。
- エ．導入後の測定を省略するため。

答え・解説

正答：ア

ア：基準値があれば、効果の差分と目標達成度を評価しやすい。

イ：データ収集自体が性能向上を生むわけではない。

ウ：要件定義の代替ではない。

エ：導入後実績との比較が必要である。

総合解説：投資効果・業務効果の実績評価には、データ収集・分析と成果指標の設定が必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0132

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：基礎

「顧客問い合わせへの初回回答を早くする」ことが目的のシステムで、成果指標として最も直接的なものはどれか。

- ア．開発時のソースコード行数。
- イ．問い合わせ受信から初回回答までの時間。
- ウ．サーバラックの台数。
- エ．プロジェクト会議の回数。

答え・解説

正答：イ

ア：開発規模であり業務効果を直接示さない。

イ：目的に直接対応する時間指標なので効果を評価しやすい。

ウ：設備量は顧客への回答時間と直接結び付かない。

エ：会議回数も成果そのものではない。

総合解説：成果指標は改善目標に対応して設定する必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0133

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：基礎

導入計画では年間1,000時間の作業削減を見込んだが、実績は600時間だった。最も適切な対応はどれか。

ア．600時間削減できたので計画値との差は分析しない。

イ．計画値を600時間に書き換えて達成扱いにする。

ウ．差異の原因を、利用率・業務量・機能利用状況などから分析し、改善または次期企画へ反映する。

エ．実績測定を中止する。

答え・解説

正答：ウ

ア：一部効果があっても目標未達の理由は重要である。

イ：事後的な目標改変は評価を歪める。

ウ：計画と実績の差を分析して改善や次期企画へのフィードバックに使う。

エ：実績データがなくなると効果評価できない。

総合解説：シラバス20-1は新システムによる投資効果・業務効果の実績を評価し、次期企画へフィードバックする能力を求める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0134

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：標準

新CRM導入後に売上が20%増えたが、同時期に大規模値下げキャンペーンも実施していた。CRM効果を評価する方法として最も適切なものはどれか。

ア．売上増加20%をすべてCRMの効果と断定する。

イ．外部要因があるためCRM効果は一切評価できないとする。

ウ．売上ではなくサーバCPU利用率だけでCRM効果を測る。

エ．キャンペーン等の外部要因を分けて分析し、CRM利用状況や対象群の差など複数の証拠から寄与を推定する。

答え・解説

正答：エ

ア：他要因の寄与を無視している。

イ：完全な切分けが難しくても分析は可能である。

ウ：技術指標だけでは売上効果を説明できない。

エ：効果の帰属には同時発生要因を考慮し、複数データで分析する必要がある。

総合解説：効果分析では適切なデータを収集・分析し、成果指標に対する実績を評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0135

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：標準

新しい分析機能は高い精度を持つが、対象社員の20%しか利用しておらず、業務効果が出ていない。最も適切な改善はどれか。

- ア．利用しない理由を調査し、業務プロセスへの組み込み、教育、UI、権限など導入定着の要因を改善する。
- イ．精度が高いので効果未達を無視する。
- ウ．利用率を測定しないようにする。
- エ．利用者に理由を聞かず利用を強制し、業務適合性は確認しない。

答え・解説

正答：ア

ア：技術性能だけでなく、実際に業務で利用され成果へつながるかが重要である。

イ：効果未達の事実は残る。

ウ：測定停止は改善材料を失う。

エ：強制だけでは根本原因を解決しない。

総合解説：業務効果は利用目的の実現度と実績で評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0136

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：標準

クラウド移行でサーバ購入費は削減したが、利用料と運用監視費が大幅に増えた。投資効果評価として最も適切なものはどれか。

- ア．サーバ購入費が減った時点で投資効果は成功と判定する。
- イ．初期費用だけでなく、運用期間中の利用料・運用費・移行費等も含めて総コストと便益を比較する。
- ウ．クラウド利用料はIT費用ではないので除外する。
- エ．運用費増加は利用部門へ転嫁すれば評価不要とする。

答え・解説

正答：イ

ア：初期費用だけでは全体経済性を誤る。

イ：投資効果は関連する費用と便益を期間全体で捉える必要がある。

ウ：継続利用料も明確なコストである。

エ：費用負担先を変えても組織全体のコストは消えない。

総合解説：投資効果の実績評価では、適切な指標とデータで計画に対する成果を確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0137

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：標準

新システムにより処理時間短縮に加えて、監査証跡が明確になり内部統制上の安心感が高まった。評価として最も適切なものはどれか。

ア．金額換算できない効果はすべて無視する。

イ．定性効果だけを理由に定量測定をやめる。

ウ．時間削減など定量効果と、統制・透明性など定性効果を区分し、それぞれ根拠と指標を明確にして評価する。

エ．効果項目を一つにまとめ、根拠を記録しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：重要な非金銭効果を取り逃す。

イ：定量効果も継続して測るべきである。

ウ：効果の性質に応じて適切な指標・証拠を用い、複数側面を評価する。

エ：根拠がないと再評価・説明ができない。

総合解説：投資・業務効果は改善目標と成果指標を設定し、適切な指標で分析する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0138

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：標準

効果評価で、利用者が高頻度に使う機能だけ想定以上の効果があり、使われない機能が多いことが分かった。次の対応として最も適切なものはどれか。

ア．評価結果は現行システムだけの話なので次期企画には使わない。

イ．使われない機能をそのまま増やす。

ウ．利用実績を削除して計画値だけを残す。

エ．利用実績と効果を次期システム企画に反映し、高価値機能へ投資を集中する候補として検討する。

答え・解説

正答：エ

ア：学習結果を捨てることになる。

イ：低利用機能の追加は合理性に欠ける。

ウ：実績データは重要な企画材料である。

エ：実績評価は次期ビジネスモデルやシステム方式の企画へフィードバックする価値がある。

総合解説：シラバスは効果分析結果を次期ビジネスモデルや情報システム方式の企画へフィードバックする能力を明記する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0139

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：応用

新システムは初年度に大きな移行費用が発生するが、2年目以降は毎年運用費が削減される。単年度だけで投資効果を判断する問題点として最も適切なものはどれか。

ア．費用と便益の発生時期が異なるため、評価期間全体の実績を見ないと中長期の効果を誤る可能性がある。

イ．初年度費用は投資効果に含めてはいけなため。

ウ．2年目以降の運用費はIT投資と無関係だから。

エ．投資効果は必ず1か月だけで評価する規則があるため。

答え・解説

正答：ア

ア：ライフサイクル全体の費用・便益の発生を捉えることが重要である。

イ：初期投資も当然評価対象になり得る。

ウ：運用費削減は典型的な効果の一つである。

エ：一律1か月という規則はない。

総合解説：評価期間と効果発現時期を明示し、計画と実績を継続的に比較する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0140

評価・保守・改善 > 投資効果・業務効果評価 | 難易度：応用

入力作業時間は50%短縮したが、最終的な受注リードタイムは変わらなかった。最も適切な評価はどれか。

ア．入力時間が半減したので最終業務効果も達成したとみなす。

イ．入力工程の改善は確認しつつ、受注全体のボトルネックを分析し、最終成果へつながらない理由を特定する。

ウ．受注リードタイムは測定せず、入力時間だけを成果指標にする。

エ．システムに関係なく必ず他部署の責任と判断する。

答え・解説

正答：イ

ア：最終成果が変わっていない事実を無視している。

イ：中間KPI改善と最終的な業務目的達成は分けて評価し、プロセス全体を分析する。

ウ：最終KPIを外すと本来の目的を評価できない。

エ：原因はデータに基づいて特定すべきである。

総合解説：適切な指標を用い、業務効果の実績を目的との関係で分析する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0141

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：基礎

OSのサポート終了に伴い、アプリケーションを新OSへ対応させる変更は、主にどの保守目的に当たるか。

- ア．既知障害の是正だけ。
- イ．利用者機能の改善だけ。
- ウ．新しい環境への適応。
- エ．障害発生を隠すための変更。

答え・解説

正答：ウ

ア：不具合修正だけを目的とする変更ではない。

イ：機能改善だけでも異なる。

ウ：外部環境の変化へ追随するための適応的な保守に相当する。

エ：障害隠蔽は保守目的ではない。

総合解説：シラバス21-1は修正依頼の種類としては是正、改善、予防、新しい環境への適応などを挙げる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0142

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：基礎

保守の修正依頼を分析するときの観点として最も適切なものはどれか。

- ア．依頼者の役職だけで優先順位を決める。
- イ．ソースコードの文字数だけを確認する。
- ウ．他システムへの影響は分析しない。
- エ．修正量・費用・時間などの範囲と、性能・安全性・セキュリティ等への重大性を分析する。

答え・解説

正答：エ

ア：優先度判断の根拠として不十分である。

イ：文字数だけでは影響を評価できない。

ウ：インタフェース先への影響も重要な分析対象である。

エ：シラバスは範囲と重大性、組織や既存・連携システムへの影響を分析することを求める。

総合解説：修正前に問題を再現・検証し、影響範囲と重大性を把握する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0143

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：標準

本番で「時々二重登録される」という報告を受けた。最初の保守対応として最も適切なものはどれか。

ア．発生条件・ログ・関連変更を収集し、問題を再現または検証して原因と影響範囲を明らかにする。

イ．原因を確認せず、登録処理を全面的に書き換える。

ウ．報告件数が少ないため記録せず放置する。

エ．二重登録データを削除するだけで修正完了とする。

答え・解説

正答：ア

ア：問題報告は再現・検証してから修正方針を決めることで誤修正を防ぐ。

イ：原因不明の全面書換えは新たな障害を生むリスクが高い。

ウ：頻度が低くても重大性や影響を評価すべきである。

エ：データ修正だけでは原因が残り再発する。

総合解説：シラバス21-1は問題報告又は修正依頼を分析し、問題を再現又は検証するとしている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0144

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：標準

顧客IDの桁数を10桁から12桁へ変更する。保守影響分析として最も重要なものはどれか。

ア．顧客マスタテーブルの列長だけ変更する。

イ．DB、API、バッチ、帳票、連携先、入力検証など顧客IDを利用する箇所を横断して影響を追跡する。

ウ．画面表示だけ変更し、外部連携は確認しない。

エ．本番でエラーが出た箇所だけ順に修正する。

答え・解説

正答：イ

ア：DBだけではアプリ・連携の制約が残る可能性がある。

イ：共通データ項目の変更は多くのシステム・インタフェースへ波及するため横断分析が必要である。

ウ：外部連携への影響を見逃す。

エ：事後対応だけでは業務停止のリスクが高い。

総合解説：保守では既存システムおよびインタフェースしているシステムへの影響を分析する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0145

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：標準

性能問題に対し、A案は短期間だが暫定対応、B案は長期的に解決するが停止時間が長い。最も適切な進め方はどれか。

- ア．最初に思いついたA案を無条件で実施する。
- イ．技術者だけでB案を選び、業務影響は説明しない。
- ウ．効果、費用、時間、停止影響、リスクを比較して選択肢を文書化し、契約・権限に従って承認を得る。
- エ．両案の比較記録を残さず、口頭で決める。

答え・解説

正答：ウ

- ア：他案や長期影響を評価していない。
 - イ：業務停止を含むため関係者調整が必要である。
 - ウ：修正の選択肢を分析・文書化し、承認プロセスを経ることが重要である。
 - エ：記録がないと判断根拠・監査性が失われる。
- 総合解説：シラバス21-2は修正の選択肢を作成・文書化し、契約の指定に従って承認を得るとしている。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0146

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：標準

保守修正版を本番へ反映したが、どのソース・設定・DBスクリプトを使ったか記録がない。最も大きな問題はどれか。

- ア．ソースコードのコメントが少ないことだけ。
- イ．本番ユーザー数が増えること。
- ウ．バックアップ媒体の容量が必ず不足すること。
- エ．本番構成を再現できず、障害分析・ロールバック・監査・次回変更の基準が失われる。

答え・解説

正答：エ

- ア：コメント量だけが中心問題ではない。
 - イ：ユーザー数増加とは直接関係しない。
 - ウ：容量不足が必ず起きるとは限らない。
 - エ：変更後の構成識別ができないと、保守の再現性と統制が損なわれる。
- 総合解説：保守は構成管理・変更管理と連携し、修正版の対象と状態を管理する必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0147

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：標準

重大障害のため通常承認を省略して緊急パッチを適用し復旧した。次に行うべきこととして最も適切なものはどれか。

- ア．変更内容・理由・影響・テスト結果を記録し、事後承認と恒久対策、構成情報更新を行う。
- イ．復旧したので記録せず終了する。
- ウ．緊急時に使った一時ファイルを本番標準として無期限に残す。
- エ．通常変更プロセスを今後すべて廃止する。

答え・解説

正答：ア

ア：緊急性により一部手続を簡略化しても、事後に統制・構成・恒久対策へ戻す必要がある。

イ：記録がないと再発・監査・次回保守に支障が出る。

ウ：暫定物を無管理で残すと新たなリスクになる。

エ：緊急例外を通常化するのは不適切である。

総合解説：変更管理は緊急時にも追跡可能性と承認、構成の整合を回復させることが重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0148

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：標準

運用チームが毎月同じ手作業ミスを起こしている。継続的改善として最も適切な進め方はどれか。

- ア．毎月注意喚起メールを送るだけで効果を測定しない。
- イ．原因と発生頻度を記録し、自動化・チェック・手順変更等を実施して、再発率や工数の変化を確認する。
- ウ．ミスの記録をやめて発生件数をゼロに見せる。
- エ．担当者を毎月交代すれば原因分析は不要とする。

答え・解説

正答：イ

ア：注意喚起だけでは効果の有無を判断できない。

イ：改善は原因分析、対策、効果測定を繰り返すことで定着する。

ウ：記録を消してもミスは減らない。

エ：人を替えるだけでプロセス原因は残る可能性がある。

総合解説：保守・運用で得た問題点から改善策を策定し、効果を評価して継続的に改善する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0149

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：応用

保守案件が同時に3件ある。Aは軽微な表示不具合、Bは高頻度ではないが個人情報漏えいにつながる可能性、Cは処理時間を5%短縮する改善である。最も適切な優先判断はどれか。

ア．最も頻繁に報告されるAを必ず最優先にする。

イ．性能改善のCを常に最優先にする。

ウ．発生頻度だけでなく安全性・セキュリティへの重大性と影響範囲を評価し、Bを高優先度として扱う。

エ．3件を同じ優先度にして先着順で処理する。

答え・解説

正答：ウ

ア：頻度だけで重大性を判断している。

イ：改善効果だけで機密性リスクを上回るとは限らない。

ウ：重大性には性能だけでなく安全性・セキュリティへの影響も含まれ、頻度が低くても高リスクなら優先すべき場合がある。

エ：影響と重大性が異なる案件を一律に扱うのは不合理である。

総合解説：シラバス21-1は修正の重大性として性能、安全性、セキュリティへの影響などを挙げる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01

0150

評価・保守・改善 > 保守・変更・継続的改善 | 難易度：応用

保守変更で処理性能は向上したが、新UIにより入力ミスが増えた。最も適切な対応はどれか。

ア．性能が向上したので保守は完全成功と判定する。

イ．入力ミスは利用者責任として計測しない。

ウ．性能変更を無条件で元に戻し、原因分析は行わない。

エ．性能向上だけで完了とせず、業務影響を評価し、必要ならUIは正や教育を含む追加改善を行う。

答え・解説

正答：エ

ア：業務品質の悪化を無視している。

イ：利用者だけに帰責せず原因を分析すべきである。

ウ：原因や代替策を評価せず全撤回するのは適切とは限らない。

エ：変更の影響は技術性能と業務運用の両面で確認し、負の副作用も改善対象にする。

総合解説：保守・変更後も運用・業務評価を通じて効果と副作用を確認し、継続的改善につなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-09-01